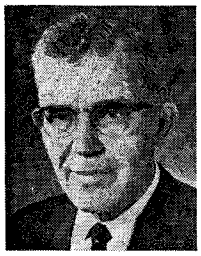
聖徒の道 1972年8月20日発行（毎月1回20日発行）第25巻 第8号
昭和42年12月18日第三種郵便物認可

聖徒の道 1972 8

心　の　糧



七十人最高評議員会会長

S・ディルワース・ヤング

この世の父親というものは，自分の子供たちに対する愛を自分のできる限り，この世での便宜をはかってやることによって示す。それに比べて，キリストの愛は，何と偉大であろうか。私たちが，この世の成長だけでなく，救い，昇栄，永遠の生命という，主のお与えになったものを受け入れることにより，キリストは私たちの父となられるのである。キリストは，その福音で，天の驚異の傍観者としてではなく，その創造者となる機会を私たちに提供している。私たちは天上でその機会を喜ぶ，がい旋の歌を歌うのである。その御計画は，極めて簡素であり，また荘大である。

1．主イエス・キリストを救い主として受け入れ，その聖なるみ名を信じ，自らの罪を悔い改める。

2．主との聖約として，神の神権を持つ者の手によるバプテスマの儀式を受け入れる。バプテスマは，主の死と復活の象徴である。

3．主より権能を与えられた者により，聖霊の賜を受ける。

4．聖なる神権を受け，それを尊ぶ。

5．主の簡明な戒めを守る。

――もくじ――

祈りの重要性と効用……N・エルドン・タナー… 337
「光は輝く」……マリオン・G・ロムニー… 340
救いの原則である正直……マーク・E・ピーターセン… 343
福千年の土台を置く……リグランド・リチャーズ… 346
告白し，罪を捨てる―まことの悔い改め……ジェームズ・A・カリモア… 350
主はこう言われる……セオドア・M・バートン… 353
まいごのこねこ……シャーロッテ・スティーブンソン… 357
信じるための勇気とは……アン・スイックスタッド… 358
ギデオン……マーベル・ジョーンズ・ガボット… 360
新しい家……メアリー・プラット・パリッシュ… 362
方針と手続き…… 365
ささいな決定……A・セオドア・タトル… 366
類なきジョセフ・スミス……レオン・R・ハートショーン… 368
質疑応答…… 374
人生の転機となった日……ウェンデル・B・ジョンソン… 378
ローカル・ニュース…… 382

8月のこよみ

17日　1935年　「誡命の書」教義と聖約となる。

25日　1878年　初等協会組織さる。初代会長オータリア・ロジャーズ

29日　1877年　ブリガム・ヤング　77歳で逝去。

今月の表紙

今月の表紙は，初めて，特に教会の子供たちのために描かれたものである。ジェリー・ハーストン氏によるこの絵は，最初，フレンド(教会の子供用英文雑誌)の表紙に掲載された。これに関する記事は，巻頭の，N・エルドン・タナー副管長の「祈りの重要性と効用」を参照のこと。

聖徒の道
1972年8月20日発行
発行人　マービン・S・ハーディング
発行所　東京都港区南麻布5-8-10
末日聖徒イエス・キリスト教会
電話(442)7459
印刷所　太陽印刷工業株式会社
定　価　100円
予　約　一年間 1,000円
外国4ドル50セント

祈りの重要性と効用

N•エルドン•タナー第二副管長

話を始めるにあたり，天父の導きがあるよう心から謙遜に祈っている。

学校に通う少年時代，私は次の有名な言葉に深い感銘を覚えた。

「この世が夢見るよりも，
祈りは多くをもたらした。」
—アルフレッド・ロード・テニソン
「アーサー王の死」

恐らく私が感銘をうけたのは，毎日朝な夕な個人的にまた家族で祈りをささげる家庭に育ったからに違いない。また種々の時期，種々の機会に，私の祈りがこたえられたからに違いない。主に呼び求めることができ，その主は文字通り天父であって私に心を寄せたまい，私の言うことをお聞きになって祈りにこたえてくださるのを知っていたことは，たとえようもない安心感を私にもたらしてくれた。私にとってこの知識は常に大きな慰めの源であった。この知識は私が最も必要な時に確信と力を与えてくれ，選択の力を与えてくれ，かつ私が他の方法ではなし得なかった決定を，確信をもってなさしめてくれたのである。これらのことを経験し，また神の導きの必要を感じていたので，私はいつも力を尽して知恵と導きを得たいと願い，またそれを求めてきた。

幼い頃，私の家ではいつも祈っていたので，世の人々は，皆自分と同じ信仰をいだき，同じように天父なる神に祈っているのだと自然に考えていた。だが成長するにつれ，大ぜいの人々が導きを求めて祈りもせず，受けている恵みに感謝もせず，食事時に口にする食物に感謝の言葉も述べていないのを知った。さらに次のことを知るに及んで，一層心に衝撃を覚えた。それは，多くの人々が，神を信じることさえもせず，従って神に信仰をもたず，また神は人格を有する存在者で文字通りわれわれの天父であられ，われわれはその天父の子供であり，天父はわれわれの祈りに耳を傾けてそれにこたえてくださることを理解していないことである。

私は，この大切な教えを教えてくれた両親に，いつも感謝せずにはおれない。私の父は主とどのように話すかを本当に知っていて，子供である私たちに，主を確かな存在者として身近に感じさせてくれた。父はよく朝に次のように祈った。「私たちが勤めに出る時に，主の祝福があって，私たちが正しいことをなせるよう，またよい家に戻った折，そのことを主に報告できるようになさしめたまえ」と。

私はその祈りについてよく考えることがある。またそれは私にとってなんと有益なことであろうか。もし誰もが，昼の間働く時に，そのような思いを心にいだき，夜家へ戻ってから，その日になした事柄を主に申し開きするのだと悟ったなら，悪に対して強い力で立ち向い，善を一層大きな力で押し進めることができるであろう。

主は，両親が，子供に祈りを教え，主の前に正しく歩むことを教えるよう勧めておられる。（教義と聖約68：28参照）子供たちに次のように教えることが，子供たちに対する最も大切な務めである。それ

は，子供たちは天父の霊の子であって，その父なる神は実在しておられ，ご自分の子らに大きな愛をおもちになり，霊の子らが成功するように望んでおられること。また他のいかなるものよりも，父なる神に信仰を置くことが一層力と成功，幸福を得るものであると悟って，天父に感謝を表わす祈りをささげ，導きを求めるよう教えることである。

両親として，子供たちを模範によって教え，神に対する信仰の価値を，われわれの生活の中で実際に祈りがきかれることを通して子供たちに示さなければならない。神を知ることを学ぶという特権や，今日の問題に対処するため，主に頼って必要な慰めや力や導きを得ることを学ぶという素晴しい祝福を，子供たちから取り上げてしまうのはなんと悲しむべきことではなかろうか。また子供たちが，あらゆるものが神から来たり，祝福を受けるにふさわしくあるよう願うことを，親から教えられないことも同時に悲しむべきことである。

皆さんは，イエスがいやされた十人のらい患者の話を覚えているであろう。一人の者が感謝を述べに来た時に，救い主はこう言われた。「きよめられたのは，十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。神をほめたたえるために帰ってきたものはこの他国人のほかにはいないのか。」（ルカ17：17—18）忘恩の罪は大きい。

われわれは，自分が受けている祝福に感謝し，自分に必要なものを祈り求める時に，われわれの信仰や祈りを必要としている人がいることに気づいて，われわれの祈りがきかれるよう主を助けねばならない。貧しき者や病める者，助けを必要としている者を神が祝福して下さるよう祈る時，また悲しむ者を慰めて下さるよう祈る時，われわれはその言葉にしたがって，行ないを示し，隣人に活発に奉仕し，必要とすることに力を貸してやらねばならない。主はわれわれを通してその目的を果たされるのであり，われわれは，自らが祝福される時，次には他人を祝福してやらねばならない。

私は自分の家族で素晴しい経験をしたことがある。ある晩，家族の祈りで主に呼びかけたあと，娘の一人がこう言った。「お父さん，私たちは本当にたくさんのお恵みや，感謝しなければならないものを受けているわ。もっと祝福してくださるように神様に祈ったらいいのかしら，それとも，受けているものに感謝して，今いただいている祝福にふさわしい者でいられるように神様の助けを求めたらいいのかしら。」天におられる父なる神が，われわれに絶えず注がれるあらゆるものを受けるのに，自分をふさわしくあらしめることの大切さを強調したい。

すべてのことがうまくゆき，祝福され，成功していると感じる時は，祈りや感謝をささげることは容易である。主に対する真の愛と感謝は，ちょうどヨブと同じように，ほとんど堪えられそうもない試練や苦難に直面した時にためされる。ヨブはそれでも主に感謝し，主をたたえ，心から謙遜にかつ純真に「わたしは知る，わたしをあがなう者は生きておられる」と呼ばわったのである。（ヨブ19：25）

天の父なる神は，われわれに必要な物を，われわれよりもよくご存じである。天父はわれわれにとって良き物が何であり，更に進歩し成長するのに，打ち勝つ必要のある物が何であるかをご存じである。主がわれわれになさるすべてのことが，最後にはわれわれのためになるという信仰と確信をもって，あらゆることに主のみ心を受け入れるよう学ばねばならない。

私は自分の娘とその夫が，子供が白血症をわずらった時に示した態度に心から感動を覚えたことがある。医者からは，その子があと1，2年以上は生きられないだろうと宣告された。このことが二人にとってどれ程大きな衝撃であったか，また二人が神殿に参入して，断食し，この子が良くなるようにどれ程嘆願したか，今でも覚えている。最も印象深いのは，次の言葉で二人の祈りが閉じられたことである。「われわれの思いのままにではなく，主のみ心のままになされるよう。そして主のみ心を受け入れられるようわれわれを強くあらしめたまえ」と。（ルカ22：42参照）

その子は医者が予測したよりも長生きしたが，とうとう天の家に召された。そのおりにこの子の両親が，少しでも長いことその子を養育できた特権を主に感謝し，その子が本当に愛らしかったので，次の世でまたもう一度その子に会い，共に住めるよう，自分たちをふさわしくあらしめたまえと主に願い求める祈りを聞いて感動を押さえ得なかった。

よくあることだが，物事がその通り進まず，思ったように運ばず落胆することがある。しかしその時こそ，一人，主のみ前にぬかずいて，心から謙遜にひざまずき，一つ一つ主の祝福を数えあげてそれに感謝し，またその祝福を受けるにふさわしくあらし

めたまえと祈ることにより，大いなる慰めと勇気，力と幸福を得られるのである。主がどれ程多くのことをなされたか，またその多くの恵みを数えるのに長い時間かかるのを知って驚くことであろう。

落胆し，困難にあうまで祈りを待ってはならない。われわれは，しばしば祈り，あらゆる良きことのため祈るよう教えられている。アダム以来すべての予言者が，またイエス・キリストでさえ，天父に呼び求めるため祈り願う必要を感じられたのである。世界中，あらゆる職業で高い地位についている人々は主の導きを嘆願してきた。また至高者としてその聖なる力を認めることにより，それらの人々は一層大きな力を得てきたのである。

例をあげれば，アメリカのほとんどの大統領は，主に呼び求める必要性を悟り，アブラハム・リンカーン大統領が言ったように，多くの機会に，祈るよう国民に呼びかけた。リンカーン大統領はこう言っている。「私はどこへも行きようのない堪え難い気持にかりたてられて幾度もひざまずいて祈った。1日を過ごすにあたって，私の知恵やまわりのものでは不充分に思われたのである。」

電信の発明者であるサミュエル・F・B・モールスは言っている。「行くべき道がはっきりと見えない時は，いつもひざまずき，光と悟りを受けるため祈った」と。

宇宙飛行士ゴードン・クーパーが，地球の周りの軌道をめぐりながらささげた，簡潔で素晴しい祈りが記録されている。「み父よ，感謝します。特にこの機会があって飛べることを。このような素晴しい場所にきて，み父が創造された驚く程に素晴しい多くの物を目にすることができて感謝します。」

謙遜で偉大な人々の言葉は，祈りとなって天父のみもとにはてしなくあげられ，あるものは最も麗しい文学にさえなっている。人は誰でも生涯のうちに自分以外の助け手を必要と感じる時がある。早くからいかに祈り，何に祈るか学ぶ者は，それを教えられもせず信じもしない人々より，祈りが力あるものであることを，どれ程多く学ぶことであろうか。

先ごろ私は1通の手紙を受けとった。筆者はその中で，教会で大きな責任をもっている人のことにふれ，やや批難めいて皮肉混じりにこう言っていた。「今，本当に助けを必要としている子がいるんですよ」と。

それを読みながら，私は，われわれすべてが助けと導きを必要としていることがどれ程真実であるか考えさせられた。また，もし必要とする助けの度合いに違いがあるとすれば，責任が増すごとにその度合いも増し，自分のみではなく他人にも責任のある地位が重くなる程増してゆくように思われた。謙遜な人程，共に交わり働くことを許されている人々の愛と信頼を，一層勝ち得て楽しめるものだわかった。

両親が毎日朝晩子供たちを呼び集め，一人一人に主に祈る特権を与え，家族が受けている多くの恵みを家族全員のために感謝させ，誰か個人にまた家族全体にかかわる問題のために祈らせ，夜帰ったら主に報告することを覚えて，朝その導きを求めて祈らせる，それはきわめて大切なことである。

天父は祈りを聞きそれにこたえられるという確かな知識をいだいて，この世の両親がするように，天父に呼び求めるよう早くから子供に教えねばならない。ヒュー・B・ブラウン長老のお母さんが，彼が20歳位の時，伝道に出るおりに励まし与えた話に，私はいつも感動させられる。お母さんの励しの言葉とは，

「ヒュー，お前は小さい時のことを覚えているでしょう。お前はよく夜こわい夢をみて驚いて目をさますと，お前のへやから『お母さんいる』と声をかけたわね。私はそれにこたえ，お前を慰めて，こわさをしずめてあげたものでした。お前は世間に出てこわいと思ったり，自分が弱いと思ったり，悩む時があるでしょう。その時は，お前が小さい時に私を呼んだように，『お父さん，おられますか，助けて下さい』と天父に呼びかけられることを知っていて欲しいと思います。また，お父さんは確かにおられて，もしあなたが自分のなすべきことを果たし，主の祝福を受けるにふさわしい生活をするなら，天父はあなたを助ける用意をしておられるという確信をもってそうして欲しいと思います。」(1969—70年用「家庭の夕べ」のテキストの中の「伝道に参加すること」を参照のこと)

もし，まだよくわかっていないとすれば，われわれ皆が，祈りとは，天父との間を活気に満ちて，生き生きと結びつけてくれる鎖の輪であり，われわれの生活に意味と目的を与えてくれるものであるということを，また，永遠の幸福と進歩とは，神を主とする人々にのみもたらされるものであることを見い出されるよう祈ってやまない。

愛する教会員，そして非教会員の皆さん，私も皆さんも共に主のみたまの導きがあって，これから私が話す間お互いに啓発されるよう祈っている。それは，主が今日の時代について，我々が陥る状態や，近い将来に起こるべきことを弟子たちに話された。そのことがらを皆さんの前に引用したいと思っているからである。

「光はやみの中に輝いている。そして，やみはこれを悟らなかった。」（ヨハネ1：5欽定訳より和訳）とイエスの愛した弟子はしるしている。

この聖句が私の心に浮かんだのは，前国連総会代表であったチャールズ・H・マリク博士の言葉を読んだからであるが，マリク博士は今日何が必要かについて次のように述べている。それは「真に万人に共通なおとずれや，偉大にしてすばらしい理想像が現われること。また英雄的な使命にこたえるという態度が求められている。……現今の状態は，すべてのものが終りのさばきにあう様相を呈している。すなわち，人の命，人の価値，文化，我々が属している文明全体の活力など，あらゆるものがはかりにかけられているのである。」

「まことに末の日の感がする。信仰ある者は，神が生きておられ，実に御自分の創造物を見守りたまい，それでもなお悲しい思いをされながら人々をこらしめられるのだというであろう。」（演説珠玉集より引用〔ハーパー・アンドロー社1964年版〕P.42）

我々の社会の悲しむべき状態を分析したこの言葉を熟考するなら，人は，今日この状態がもたらされたのは，適切な導きが欠けていたからではなく，むしろ聞く耳を持たないがためであったという結論に達するであろう。

けさ私が皆さんに話すその目的は，この問題に満ちた世界に，140年もの間信頼できる確かな光明が存在してきており，現に存在しているのを強調することにある。この光は，従おうとするあらゆる国，種族，国語，人々に喜びと平安と幸福をもたらすものである。

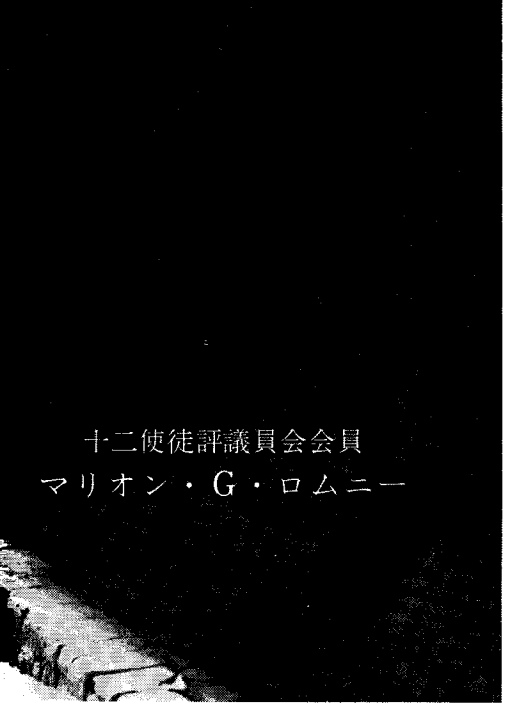
私は皆さんに，わが愛する救い主イエス・キリストが，まだこの地上におられた時に，今日我々がまのあたりにする情況を予見しかつ予告したことを証する。イエスはまたその時に，現在の我々の進路に差し迫ってくる結果をも明らかにされ，かつそれから逃れる道をも示されたのである。

イエスが語られたことは，我々にとってきわめて大切なことなので，イエスは，その記録を，三つの異なった聖典，すなわち，聖書（マタイ24章参照），高価なる真珠（ジョセフ・スミスの物語）それに教義と聖約に保存された。

イエスが語られた時の模様はこの上もなく印象深いものがある。イエスが最後にエルサレムからベタニヤへ行かれる途中，使徒らとオリブ山に立たれた。すると，宮の建物について石一つも残ることがなくなるというイエスの予言について使徒らはイエスに説明を求めた。「どうぞお話しください。いつ，そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や，世の終りには，どんな前兆がありますか。」（マタイ24：3）

私は当時エルサレムに迫っていた破壊について詳しく物語ろうとは思はない。しかし，現在や将来の安寧に関係していることなので，イエスがまたおいでになり「世の終り」がやってくる前兆についてイエスが言われたことを私と共に真剣に考えて欲しい。これらの出来事についてイエスはこのように言っておられる。「……異邦人の時始まるに及び，暗きに坐する者の中に光輝やき出でん，この光はわが完全なる福音なりとす。」（教義と聖約45：28）

さて，今日の時代に言い及んでいるこの予言は，1820年春，少年予言者ジョセフ・スミスに天父と御子がお現わ



十二使徒評議員会会員
マリオン・G・ロムニー

れになり，光が輝き出でるという事実によって立証されたのである。それに続いて，「キリストの完全な福音」は予言者ジョセフ・スミスを通じこの地上に回復された。

この偉大な出来事は「異邦人の時」の到来を告げるものであり，事実そうなったのである。すなわち，この最後の神権時代に，福音は初めにこの地のユダヤ人以外の人々にのべ伝えられるべきものであった。皆さんは，時の絶頂には，この福音がまず初めにユダヤ人，次に異邦人へとのべられたのを思い起こされるであろう。

ところで，救い主が語られた言葉に戻ろう。「……異邦人の時始まるに及び，暗きに坐する者の中に光輝やき出でん，この光はわが完全なる福音なりとす。されど彼らはその光を受け入れず，そは，彼ら光を認めざれば，人の教えの故によりてわれに心を背くればなり。」(教義と聖約45：28—29)

今日この予言が成就されているのはにがいことではあるが明白である。福音を告げられた大多数の人々はそれを拒んでいる。導きとなる光明が存在しないがためではなく，人々がそれを拒むがゆえに，この時代の人々はその進路を転じない限りは，今までもそうであったように，イエスが予見し予言した災いを免れ続けることはできないのである。そこでイエスは言われた。その時代になって福音がのべ伝えられても「彼らはその光（イエス・キリストの福音）を受け入れず。……われに心を背くればなり」と。

「……この時にあたり，その世に立ちて而も地に溢るる懲しめを見終りて後始めて過ぎ行く人に在るべし。世を滅ぼすべき疫病，地を覆うべければなり。

されどわが弟子たちは，聖地に立ちて（今しばし前，リー副管長が話されている時このことについて考えていたが）動くことなかるべし。されど悪しき人々の中には，声を挙げて神をのろい死ぬる者たちあらん。

また地震も至る所に起り多くの荒廃は来らん。されどなお人々はわれに向いてこころを頑固にし，互いに剣を執りて殺し合うべし」と。

さて（救い主はこの予言を予言者ジョセフ・スミスに繰り返されたが）主なるわれ，これらのことを弟子たちに語りし時彼らこころを悔ませり。

さればわれ彼らに言えり。汝らこころを悩ますことなかれ。そはすべてこれらの事起こる時は，汝らに為せる約束の成就するを汝らの知らんが故なり，と。」(教義と聖約45：31—35)

イエスは，光の輝き初めることに再び言い及んで，弟子たちに次のように予言を続けられた。

「この光の輝き初むる時に起ることは，汝らに示さんとする一つのたとえの如くなるべし。

汝ら，いちじくの木を眺めてこれを見るに汝らの眼を以てす。而して，若芽萌え出でてその葉なお柔かなるや夏すでに近しと汝らは言う。

人々すべてこれらのこと起るを見るその日に於て，誠にかくの如くならん。その時人々時すでに迫れるを知るべし。

およそわれを畏るる者は，来るべき主の大いなる日，すなわち人の子の来る徴を待ち望みつつあらん。

而して，人々種々の徴と驚異とを見ん。これらの徴は仰げば天にあり，伏して見れば地に示さるべければなり。人々は，血と火と烟霧とを見ん。」(教義と聖約45：36—41)

これらのいくつかのしるしをわれわれはすでに目にしており，またこの後いくつかのものを目にするであろう。イエスは更に続けてこう言われるからである。

「主の日来る前，日輪は暗くなり，月は血と変り，諸々の星は天より落つるべし。

而して，残れる人々はこの地に集めらる。〔主はオリブ山に立たれるのである〕

その時，彼らわれを求めん。見よ，われ来らん。而して彼ら，われ能力と大いなる栄光の衣を着けて天の雲に乗り，すべての聖き天使らと共に来るを見ん。而して，およそわれを油断なく待たざる者は断ち切られん。」(教義と聖約45：42—44)

だが正しき者は断ち切られることはない。福音を受け入れ，それに従って生きる者に主がなされた約束に耳を傾けよ。

「されど主の腕の下らんとする前に，まず一人の天使ラッパを鳴り響かせん。然る時は，眠り居たりし聖徒ら雲の中にてわれと遇わんために出で来らん。

この故に，汝ら（主の使徒らをさしている）穏かに眠り居たらば幸福なり。それは汝ら今やわれを見てわが在るを知る如く，汝らはわれに来りて汝らの身も霊も生き，汝らの贖い完うせらるべければなり。而して，聖徒らは地の四方より出で来るなり。」（教義と聖約45：45—46）

われわれは以上の言葉から，イエスが再臨なさる前に死してこの世を去ろうとも，あるいは生きてこの世に留まるとも，もし忠実かつ誠実であるならイエスの来る日にイエスと共にあり，喜びを得られると確信できる。

次に，復活せる者がイエスに遇うため出て来たり，イエスの再臨の日にこの地に生きている正しき者が地の四方より出で来たる後，

「……主の腕は諸々の国民に下らんそれよりして主，その足をこの山の上に置けば山は二つに裂け，地はかなたこなたに揺れ動き，諸々の天もまた震い動かん。

而して，主声を発すればその声地の極までも響きわたりて，世にある諸々の国民嘆き悲しみ，これまでわらいたる者もその愚を覚らん。

かくて侮る者は災を蒙り，嘲る者は焼きつくさるべし。また悪を待ち構えし者は叩き伐られて，火に投げ込まれん。」（教義と聖約45：47：50）

「サタンは縛られて，人の子らのこころの中に入るべき所を与えられざらん。

わが栄光をもて来るその日に，十人の処女につきてわが語りしたとえは成就すべし。

賢くして真理を受け入れ聖霊の導きに従い騙されざりし者は，誠にわれ汝らに告ぐ，彼らは伐られて火に投げ入れらるることなくその日に堪うるべし。」（教義と聖約45：55—57）

「賢くして真理を受け入れる者」とは，福音を聞いてそれを受け入れる者を指している。「聖霊の導きに従い騙されざりし者」とは，ただに聖霊の賜物を与えられるだけではなく，その後だまされることのないよう，聖霊の導きを受けられるような生活をする者を指している。イエスが来られる時に復活する者であろうと，肉体をもって生きながらえる者であろうと，このような人々は，キリストの再降臨の「大いなる日に堪える」者となる。

「地はゆずりとして彼らに与えられ彼らは殖え満ちて強くなり，その子孫らは罪を犯すことなく育ちて救いに入らん。

主は彼らの中に在りてその栄光は彼らの上に輝き，主は彼らの王にして立法者たるべし。」（教義と聖約45：58—59）

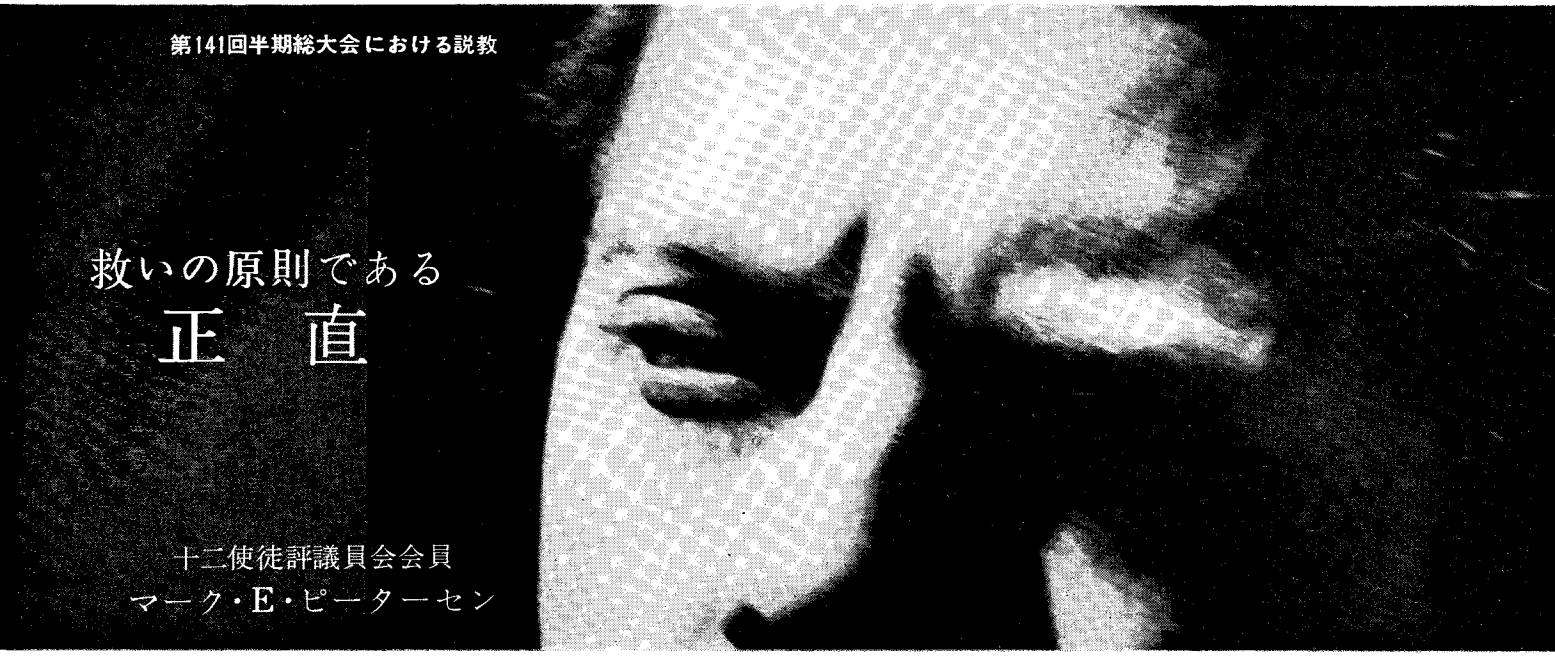
イエスのこの偉大な予言は，我々の文明の未来について，マリク博士に関心を与えた今日の苦境の原因を明らかにしている。この予言は，イエス・キリストの回復された福音が，悩める今日の世界の暗やみを照し出す確かな光であるという事実を強めてくれる。予言者ジョセフを通して回復された福音は，この立派な博士が熱望している「偉大にして素晴しき理想像」である。この福音は「英雄的な使命にこたえる」ように思われる。真に万人に共通なおとずれという課題に充分立ち向えるものである。それはこの立派な博士が，今日世界にとって必要なものと主張しているものである。末日に関するイエスの予言は，「現今の状態は，すべてのものが終りのさばきにあの様相を呈している。すなわち，人の命，人の価値，文化，我々が属している文明全体の活力など，あらゆるものがはかりにかけられている」というマリク博士の結論を確かなものにしている。またそれは今日の時代が，ただ「末の日の感がする」以上に，真実末の日であると我々に確信を与え，神は文字通り，「いまして」，「ご自分の創造物」を見守りたもうておられるという確証を与えてくれる。

我々が考察してきた以上の聖典が真実であることを私は証する。以上の聖典にあることを述べたのは，神の御子は，すなわちこの地の，またこの地の民の創造主であり贖い主であること，御子は世の初めからよろづのことを知りたまい，永遠の真理を語られたことを証する。

完全な永遠の福音が地上にもたらされていることを証する。予言された光は輝きわたっている。キリストの再臨に関する他の多くの予言のしるしは与えられてきた。また今他のしるしが現われ，残りのものも差し迫っている。

神は死にたまわないと証する。神は導いておられる。神の力—神権は地上にもたらされている。神のご計画は進められている。神の「誓約がことごとく果されるまで，主の永遠のみこころは必ずつずけて行なわれる。」（モルモン8：22）

以上のことを，私はキリストの特別の証し人として，イエス・キリストのみ名により，おごそかに証し奉る。アーメン。



救いの原則である 正　直

十二使徒評議員会会員
マーク・E・ピーターセン

末日聖徒イエス・キリスト教会の信仰箇条に，「われらは正直であるべきを信ず」（信仰箇条第13条）という信条がある。

私たちは単に政策として正直にしようと考えているのではない。そんなことよりも遙かに大切なことである正直は神の王国に救われるために守らなければならない原則である。これがなければ救いはあり得ない。男の人も女の人もバプテスマを受けなければ救われないのとちょうど同じように，誰も正直でなければ救われない。また復活しなければ天の王国に入れないように私たちは正直でなければ神の国に入ることはできない。

神は不道徳を責められるのと同じように偽善を非難される。偽善は不正直の最も悪い現われである。来たるべき世界の地獄について語られる時，神は不正直な人々がそこへ行くだろう，と語っておられるのである。汚れた者が一切神のみ前に入ることができないのと同じように，嘘をつく者も，だます者も，偽善者も神の王国に住むことはできない。

不正直は利己的な心と直接関係がある。利己的な心が不正直の源である。私たちを苦しめるほとんどすべての混乱の根底には，利己的な心が横たわっている。人が人に対して誠実でないと無数の悲しみをずっと引き起こしていく。

もし全人類が正直であれば，私たちは地上に天国を作ることができているだろう。陸軍も海軍もいらないだろう。どんな社会にも１人の警察官もいらないだろう。なぜなら犯罪は起こらないし，人の権利を犯すことも，人が人に暴力をふるうこともないからである。

離婚の原因もないだろうし，誤りを犯す夫も忠実でない妻もいないだろう。子供と両親の間のいさかいはなくなり青少年の犯罪は終りを告げるだろう。

しかし現在私たちの社会で，嘘をつこうとする傾向以上に広がっているものがあるだろうか。

子供を悪習に陥し入れようと誘うのは，薬品業者の嘘であり，純潔を犠牲にするように少女に言い寄るのは，色男のつく嘘である。

犠牲者が詐欺にかかるのは，もぐり業者の嘘にかかるからである。

脱税者が被告席にすわらなければならないのは，嘘をつくからであり，学生が学校でカンニングをするのは嘘が動機になっている。

親子の断絶を生み出すのは，子供のつくうそである。また親のつくうそもしばしばその原因になっている。

いかさま職人は不完全な修理をしてそれをかくしている。これもうそから始まっている。

うそを積み重ねていくと，人は偽善者になる。

夫婦間の不信を作り出すのは，夫のうそか妻のうそである。書類を偽造するのは横領犯人のうそがもとになっている。

万引きの母親を助ける子供が将来犯罪者になるのは，うそをつく気持に端を発している。

根拠のないうわさ話によって多くの無実の被害者の人格が殺される。

仲間を利用しようと狙ったり，はずかしめようとしたり，故意に傷つけようとする人は，全く不正直な者である。

小さな男の子が新聞を配達して得たお金を巻きあげる父親は，詐欺行為をしているのである。

婚前交渉は試験結婚の１つの型であると教えて，少女に純潔を失わせようと説くのは，牧師のうそである。少女は純真にその言葉を受け入れるかも知れない。または鈍感で受け入れないかも知れない。しかし，全能者がシナイ

山の山上で「あなたは姦淫してはならない」（出エジプト20：14）と大声で語られたのをよく知りながら，婚前交渉に何の罪もないと言ったことに対して，この人は，神の裁きの席でどんな代価を払わなければならないことだろうか。

家で妻に小言を言ったり，子供を軽んじたりして，家庭では獣のようでありながら日曜日に敬虔に教会の責任を果たし，コーラスで歌い，また主の晩餐の神聖なしるしを取るように考えるのは，偽善者の心である。

夢中になった女の子が両親をだまして，罪に引きずりおろすことしか考えていない男の子と大きな罪におちいるのはやはりうそに始まるものである。

「うそをついて生きていくことはできない」と1度も自分に語りかけたことがないくらい魂の死んだ人が一体いるだろうか。

私たち末日聖徒は神を信じている。私たちは神を信じているので，同時に悪魔がいることも信じている。この悪魔はうそつきであり，さまざまなうその父である。そしてうそをついたり，だましたりする人は，悪魔の奴隷になる。

聖典が次のように記しているのは，少しも不思議なことではない。

「主の憎まれるものが六つある，
否，その心に，忌みきらわれるものが七つある。
すなわち，高ぶる目，偽りを言う舌，
罪なき人の血を流す手，
悪しき計りごとをめぐらす心，
すみやかに悪に走る足，
偽りをのべる証人，
また兄弟のうちに争いをおこす人がこれである。」（箴言6：16—19）

このあとに続く節で，聖典は上の激しくほとばしるような言葉に続いて，もう1つの憎むべき罪をあげている。これも決してうそとごまかしと切り離すことのできないものである。それは快楽を求める性的な罪であり，神はこの罪は人の魂を滅ぼすものであると言っておられる。主は近代の啓示の中で来たるべき世界の地獄について語っておられる。そしてどんな人が苦しみを受けるかをあげられた。主は言われた。

「これらの者たちは偽りを言う者，魔術を行なう者，姦淫を行なう者，娼婦を買う者，また何人にまれ偽りを好みてこれを言う者たちなり。

これらの者は地に於て神の怒りを受くる者なり。

これらの者は永遠の火の報いを受くる者なり。

これらの者は……地獄に投げ入れられ，全能の神の怒りを受けて苦しむべき者なり。」（教義と聖約76：103—106）

私たちはほとんど皆，キリストのみ名を受け，キリストの聖いみ名において礼拝し，クリスチャンであると自称している。しかし私たちは本当に心底からクリスチャンであろうか。私たちの礼拝は本当にキリストに受け入れられるものだろうか。これは私たちが本当にキリストの戒めを守っているかどうか問うことによって決めることができる。もし守っていなかったら，キリストの名前を受ける資格があるだろうか。

ある人がこう尋ねた。「あなたが法廷で自分がクリスチャンであることを証明しなければならないとしたら，あなたは何を証拠にあげるだろうか。」

クリスチャンは，偽りの中には少しもキリストに似た資質がないことを知らなければならない。偽善の中には一点の正義もない。うその中に良いことは全くない。

もし私たちが正直でなかったら，私たちは神の目から見て清くない。そして清くない者は神のみ前に出られないことも私たちは知らなければならない。不正直な慣習にしばしば捕われることは，クリスチャンとしての生活に背くことである。キリストに背くことは反キリストになることである。私たちの中で一体反キリストになりたい者がいるだろうか。反キリストになることはキリストに対抗することであり，キリストと戦うことであり，暗黙の中に不従順になることである。キリストと戦うということは神を私たちの生活の中から追い出すことであり，さらに何にも増して自滅を招くことである。

人は哲学者ぶって神はいないと言うかも知れない。宗教を神話であると言うかも知れない。そして自分で知的なある概念を作り上げるかも知れない。しかしこれらは皆何の役にも立たない。神を消そうとするすべての主張は空虚な理論を全部合わせても，神の実在を証明する証拠の方が遙かに大きく圧倒的である。ある詩人が歌っているように，「神はいないと言うのは，愚か者だけである。」

大いなる偉業の行なわれている今日ほど，私たちの記憶に残っている他のどの時代よりも神を信じる根拠がたくさんある時代はない。すべての探険，科学上の業績が，また人を月に送り込んだことも，神の実在と神の力を宣言している。

偶然の中には少しも精密さがなく，

自然発生の中には少しも確実性がない。しかしこの宇宙には精密さも確実性もある。これは，偉大な科学者が言っているように，神の栄光を宣言するものである。昔の詩篇の作者も同じであって，次のように大声で歌っている「地と，それに満ちるもの…は主のものである。」（詩篇24篇参照）

もし私たちがほんの少しでも福音に関心を持つなら，私たちはまごころから実践すべきである。自分をあざむいて，自分の無分別の犠牲になることに何の得もない。天の王国に救われようと思えば，正直に，完全に，そしてまごころから律法を守らなければならないことは，非常に単純明快な事実である。子供でも理解できる単純な事実である。気乗りしない態度は，主に調和

しないものである。主はなまぬるい者に，お前を口から吐き出そうと言われた。

主はなぜ心をつくし，勢力をつくし思いをつくし，体力をつくして神に仕えなさい，と言われたのだろうか。

疑いの心を以て命令を受け，不精不精に守るなら私たちは，罪に定められると主が言われたことを覚えているだろうか。（教義と聖約58：29参照）

もし私たちが本当にクリスチャンになろうと思えば，私たちは次の言葉を覚えて守るはずである。

「……祭壇に供え物をささげようとする場合，兄弟が自分に対して何かうらみをいだいていることを，そこで思い出したなら，その供え物を祭壇の前に残しておき，まず行ってその兄弟と和解し，それから帰ってきて，供え物をささげることにしなさい。」（マタイ5：23—24）

「何事でも人々からしてほしいと望むことは，人々にもそのとおりにせよ。」（マタイ7：12）

「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。」（マタイ22：39）

また救い主が次のように言われたことを思い出すだろうか。「偽善者たちのようにするな。」（マタイ6：5）主はさらにまた，「だれも，ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。…あなたがたは，神と富とに兼ね仕えることはできない。」（マタイ6：24）と言われた。

また次のような大切な聖句もある。「欺くことをする者は，わが家のうちに住むことができません。偽りを言う者はわが目の前に立つことができません。」（詩篇101：7）

全能の神は，シナイで盗んではならないと命じられた時，同時にこう言われた。「あなたは隣人について，偽証してはならない。」また隣人のものをむさぼってはならない，とも宣言された。（出エジプト20：16—17参照）

近代の啓示で主は次のように力強く言われた。「汝ら偽りを言うなかれ。偽りを言いて悔い改むるこころなき者は捨てらるべし。」（教義と聖約42：21）

そしてキリストの教えの重要な部分として，次のように言われた。「汝ら隣人の悪口を言いまたこれに害を与うることなかれ。」（教義と聖約42：27）

そして次に全く違った観点から，言いかえれば，人類にあらゆる不正直に導く貪欲を避けるように教えられた反面，もっと高い次元の道を取るように強く勧められた。隣人から取る代りに私たちは与えることを学ばなければならない。文字通り良いサマリヤ人になるのである。周囲にいる不幸な人に分け与え，実際に隣人に愛を示すのである。主は言われた「…汝ら貧しき者のことを思い起し，彼らに与えざるべからざる扶助のために，…己が財物を神に奉献せよ。また汝らの財物を貧しき者に分ち与うれば汝らこれをわれに為すなり。……」（教義と聖約42：30—31）

救い主は罪の大きな重荷を知っておられた。救い主は私たち1人1人のためにこの重荷をゲツセマネと十字架の上で負われた。救い主は，罪深い生活が多大の代価を費やすものであり，みじめなものであることと，罪悪が決して幸福をもたらさないことを知っておられた。救い主は私たちに軽い重荷を負うように，むしろ喜びと救いを，深い満足を得るように招かれた。主はこう言われた。

「すべての重荷を負うて苦労している者は，わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。

わたしは柔和で心のへりくだった者であるから，わたしのくびきを負うてわたしに学びなさい。

そうすれば，あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。

わたしのくびきは負いやすく，わたしの荷は軽いからである。」（マタイ11：28—30）

主は，私たちが皆悔改める必要があること，もし私たちが本当に悔改めて主の愛とゆるしと従順のくびきを受け入れるなら，主は私たちを受け入れて下さることを，明らかにされた。

主は古代の使徒ヨハネによって次のように言われた。

「…神が光の中にいますように，わたしたちも光の中を歩くならば，わたしたちは互いに交わりをもち，そして御子イエスの血が，すべての罪からわたしたちをきよめるのである。

もし，罪がないと言うなら，それは自分を欺くことであって，真理はわたしたちのうちにない。」

しかし，「もし，わたしたちが自分の罪を告白するならば，神は真実で正しいかたであるから，その罪をゆるし，すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。」（Ⅰヨハネ1：7—9）

「兄弟を愛する者は，光におるのであって，つまずくことはない。

兄弟を憎む者は，やみの中におり，やみの中を歩くのであって，自分ではどこへ行くのかわからない。やみが彼の目を見えなくしたからである。」（Ⅰヨハネ2：10—11）

またさらにヤコブは，行ないのない信仰は死んだものである，と言っている。私たちは信仰を行ないと，行ないを信仰と結びつけて，本当のクリスチャンにならなければいけない。また，私たちの行ないは，真実の行ないでなければならない。（ヤコブ2：17—18参照）

神のみたまは真理のみたまである。救い主は真理を体現した方である。救い主は自分のことを次のように描写された。「わたしは道であり，真理であり，命である。だれでもわたしによらないでは，父のみもとに行くことはできない。」（ヨハネ14：6）

真理によらなければ，神の王国に救われない。そしてこの真理はキリストである。これが私の証である。主イエス・キリストのみ名により，アーメン。

福千年の土台を置く

十二使徒評議員会会員
リグランド・リチャーズ長老

私は，この午後に信仰深い末日聖徒と共にまた教会の大会に出席できる特権を，天父に感謝する。

救い主は言われた，「人はパンだけで生きるものではなく，神の口から出る一つ一つの言で生きるものである。」（マタイ４：４）私は，この大会の最後の３つの集会に出席する特権に恵まれた人々が，真実永遠の生命のパンによって養われたと感じていると確信する次第である。我々は主のしもべたちからすばらしい勧告と霊感を与えられた。

パンは体を養うであろう。しかし霊を養うのはそれ以上のことである。音楽はすばらしい。私はここでリックス・カレッジの合唱団の人々に賛辞を呈したい。私はほんの３週間前，リックス・カレッジの礼拝に出席したが，我々は主の教会のあらゆる施設およびそれらによる教育の機会が教会の若者に多大の貢献をしていることを感謝せざるを得ないのである。

きょう私は，我々の信仰の土台について，また，我々の目的，望みはいったい何であるかについて少し述べたいと思う。私はこの美しい神殿が基礎の上に築かれた，百年以上も昔の時代を思い浮かべる。基礎が置かれた時，それは16フィート（およそ５メートル）の巾であると言われているが，ある時ブリガム・ヤング大管長がやってきて職人たちが薄く削ったみかげ石を積んでいるのを見た。彼はそれをとりのけさせ，「我々はこの神殿を福千年にも立つように建てているのだ」と言いながら，大きなみかげ石の塊を置かせた。それはすばらしい考えではなかろうか。我々はみな，福千年にも立っていられるように，自分や家族の生活をしっかり築こうと望むべきである。

午前の集会でロムニー兄弟が救い主の再降臨に関して主御自身や予言者たちの記した約束を述べた時，我々のうちのだれが，神のラッパが鳴り響いて死者がよみがえる時，我々も愛する者たちと共に主のみまえで彼らの中に加えられるべく生きたいと願わなかったことであろうか。

私は，パトモス島に追われ，天使から，サタンの投げ落された天上の戦いに始まって最後の時の様子までを示された使徒ヨハネの言葉について考える。彼は死者が小さき者も大いなる者も神のみまえに立ち，数々の書が開かれ，死者の書に記された事から彼らの働きによって，すなわち信仰でなく，口から出た言葉でなく，その働きによって裁かれているのを見た。（黙示20：12—14参照）

「……彼らは生きかえって，キリストと共に千年の間，支配した。（それ以外の死人は，千年の期間が終るまで生きかえらなかった。）これが第一の復活である。この第一の復活にあずかる者は，さいわいな者であり，また聖なる者である。この人たちに対しては，第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストとの祭司となり，キリストと共に千年の間，支配する。」（黙示20：４—６）

ひとたび神聖なみたまに打たれて証を得ながら，神のラッパが鳴り響く１千年の間，そのまま留まって自分を備えることに満足できる者はいるであろうか。あの神殿が福千年も立ち続けるために５メートルの基礎が必要だとするならば，我々がこの栄えある出来事に備えるには，多大の従順が必要とされる。

救い主は言われた，「命にいたる門は狭く，その道は細い。そしてそれを見いだす者が少ない。」（マタイ７：14）我々は命にいたる狭くて細い道を歩みたいと望んでいる。主はまた，ある時このように言われた。

「…わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを，岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。雨が降り，洪水が押し寄せ，風が吹いて

その家に打ちつけても，倒れることはない。岩を土台としているからである。また，わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を，砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。雨が降り，洪水が押し寄せ，風が吹いてその家に打ちつけると，倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである。」（マタイ７：24—27）

聖なる神殿が福千年にも立つために土台の種類が重要であったと同様，永遠の幸福にとって，我々の生活の土台はどのようであるかが重要なことである。

数年前南部諸州伝道部の伝道部長であった時，私はジョージア州キットマンで，ある晩結婚の誓約と家族の一致について説教をした。私はルーロン・S・ハウエルズ兄弟の「人は自分の教会の教えを信じるか」という本から引用した。彼はチャートを使って，おもな教会をあげ，主要な原則に対する各々の教会の主義，主張を述べているがある教会は結婚誓約が永遠に存続すると信じ，またある教会はそれを否定している。

私は，彼らがどうして聖書を読みながら信じないか，なぜ世界中の教会で死が２人をわかつまでと結婚式を執行しているのか，理解できない。それは何と浅薄な概念であろう。なぜ彼らは神がこの地球の創造を終えてそれをよしと見られ，アダムをここに置かれた時，「人がひとりでいるのは良くない」（創世２：18）と言われたことに思いをはせないのか。主は彼の助け手をつくり，「一体となるのである」（創世２：24）と言われた。さて，神があわせ１つの肉とされたものを，我々は完全と完全ではなく半分と半分にしかわけることはできない。イエスはそのことを繰り返して言われた。

「『……それゆえに，人は父母を離れ，その妻と結ばれ，ふたりの者は一体となるべきである』……だから，神が合わせられたものを，人は離してはならない」（マタイ19：５—６）

私はその集会の終りに，ドアの所に立って帰る人々と握手をした。すると１人の男性がやってきて，自分はバプテスト教会の牧師ですと紹介をした。私が「先ほど不正確な引用でもしましたか」と尋ねると，彼は「いえ，リチャーズさん，あなたのおっしゃった通りです。私たちは自分の教会の教えを全部信じてはいません」と言った。私は「あなたも信じていらっしゃらないのですか。真理にたち帰って，教会の人々に真理を教えてはいかがです。彼らはモルモンの長老たちから話を聞かなくとも，あなたからなら耳を傾けるでしょう」と言った。彼は，「ではさようなら」と言い，その晩の会話はそれきりであった。

およそ４カ月ほどたって，その支部で開かれた大会に再び出席した時，私が伝道部長であったためにそのことが新聞に報道された。私がその小さい教会堂に入ろうとすると，あのバプテス

ト派の牧師が私を待ちかまえていた。我々は握手をかわした。私が「この前の私の説教をどう思われたか，知りたいと思います」と言うと，彼は，「リチャーズさん，そのことをずっと考えていました。あなたのおっしゃることはみなもっともだと思います」と言い「でも，残りの1つについて知りたいです」と言った。妻子を心から愛する者でこの原則を信じたいと思わぬ者はいったいいるであろうか。

結婚は永遠であるべきだと信じている人々はいる。しかし我々の知る限りにおいて，この教会を除いて，結婚誓約の永遠性を信じる教会は世界にないのである。

我々が永遠に生き続けると知る時，生活に起きる相違を考えてみなさい。死によって妻子と離され，それ以後まみえることはないと考えるなら，死によって体も霊も無になってしまうということを信じることができよう。そこに，待ち望むべきものは多くはないと申しあげる。この世で結ばれた愛の絆が断ち切られるならば，どうして永遠に生き続けたいと望むであろうか。

我々は子供の誘かい事件を時折耳にする。たしか1932年のことであったと思うが，リンドバーグ大佐の息子が誘かいされ，5万ドルの身代金を要求するメモが残されていた。大佐は息子が返るなら喜んで身代金を払おうとしたのである。ここに，我々は永遠の生命のことを思い浮かべる。けさマリオン・G・ロムニー兄弟は，復活の時に子供たちは成長して罪がなく救われるにいたるという主の啓示を引用した。(教義と聖約45：58参照)

我々の中には，子供をなくして，育てる責任を持てなかった人々がいる。私がオランダで伝道部長であった時に1人の娘が生まれたが，その子は3歳半で死んでしまった。妻は折にふれては，天使たちがその子の霊を自分のところに連れてきてくれるように感じると言うが，娘は墓に身を横たえたのである。もしそれですべてが終りだと思うならば，この世の何を失ってもその子をもう一度生き返らせてほしいと願うことであろう。我々は回復された福音により，娘は永遠の世界で我々のものとなって，罪なく育ち救いに入るのを見る喜びが与えられるという偉大な知識を知らされている。私は時々，それらの選ばれた霊のいくらかはほかの子供たちのようにこの世の経験を経る必要がなかったために，主がみもとに招いて下さるにふさわしいのではないかと思うことがある。

我々には4女が恵まれたのちに1人の息子が生まれた。我々はカリフォルニアへステーキ部長としてつかわされたが，そこで息子は高等評議員の兄弟やその息子たちと共に外へでかけて，事故にあい命を失った。それは今までで一番大きな悲しみであった。しかし今，我々は，山の頂にのぼって声を限りに叫ぶのである。我々は永遠の父なる神がこの愛の絆を永遠にわたってながらえさせたもうことを知り，それを待ち望んでいると。愛する大切な人々とまた会えると知ることは，死のとげをとり去る。この知識を神に感謝したてまつる。我々は栄光を受けあがなわれた御父の子供たち，愛する者たちと共に立つにふさわしい基をこの地上で築きたいものである。

兄弟姉妹たち，我々は祝福された民である。我々は，福音が回復され，真理の知識が存在する時に地上に生を受けるという特権に恵まれている。信仰を築く土台に恵まれ，愛する人々と過ごす毎日はしあわせな日々である。マッケイ大管長がよく，いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできないと言われたことに，全く不思議はない。また，人が神のいましめを守り，神に近くなればなるほど，家庭における愛は増し，愛が来たるべき永遠にわたって続くという知識に対して感謝も大きくなるのである。

私が南部諸州伝道部の伝道部長であ

った時，ある教師がモルモンの生徒に本を貸したが，本が返されて来た時，そこに信仰箇条のカードがはさんであり，教師はそれを読んだ。彼女は自分の教会の牧師のところへ行き，「私たちの教会にはどうしてこのようなものがないのですか」と尋ねた。牧師は彼女を満足させる答えができなかったので，彼女はソルトレーク市の案内所に手紙を出した。そこから彼女に文献が送られ，彼女の名前は我々にも知らされて宣教師が訪問し，彼女は教会に入った。

私は予言者ジョセフ・スミスの書いた信仰箇条を読む時，(その他にも彼があげなかった大切な教義は数多いが)人はこの信仰箇条を読んでなぜそこに真理があると信じないのだろうかと思う。他のどの教会も，このような基盤を持っていない。終るにあたって，私は信仰箇条から読んでみたい。

「われらは，永遠の父なる神と，その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず。」予言者は，２人の別々の御方が骨肉の体を持ち，聖霊の御方であると教えた。

「われらは，人は皆各々其身にてなしたる罪に対して罰を受け，アダムの咎に対して罰を受けざることを信ず。」

「われらは，キリストの贖罪によりすべての人類は，福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得ると信ず。」今日説かれている説教のほとんどは，イエスを救い主として信仰を告白しさえすればよいというが，我々はイエスの言われたことを行なわねばならないと主張している。

「われらは，福音の第一原則と儀式とは，第１．主イエス・キリストを信ずる信仰，第２．悔改め，第３．罪の赦しを受くために水に沈めらるるバプテスマ，第４．聖霊の賜を授かるための按手礼，なることを信ず。」私はこの基の上に建っている教会は他にないと信じるが，ヘブル書の６章を開いてみればパウロはこのように述べている。

「……わたしたちは，キリストの教の初歩をあとにして，完成を目ざして進もうではないか。今さら，死んだ行いの悔改めと神への信仰，バプテスマについての教と按手，死人の復活と永遠のさばき，などの基本の教をくりかえし学ぶことをやめようではないか」(欽定訳ヘブル６：１－２より和訳)

これは我々の信仰箇条とまったく同じである。

「われらは，福音を宣べ，且つその儀式を執り行うためには，啓示と，権威ある者の按手により，神によりて其任に召されねばならぬことを信ず。」他のどの教会もこのことを信じていない。彼らは聖書を読むことによって権威があると考えるのである。

「われらは，教会には，初期の教会に在りたると同一の組織，すなわち使徒，予言者，監督，教師，祝福師等のあるべきことを信ず。」パウロは，主の教会はキリスト御自身を隅のかしら石とし，使徒と予言者を土台として建てられると教えているが，このような土台を持つ教会は他にない。

「われらは，異言を語る力，予言する力，啓示，示現を受くる力，病を医す力，異言を釈く力等の賜あることを信ず。」

「われらは，正確に翻訳されたる限り，聖書は神の御言葉なりと信ず。またモルモン経（英文）も神の御言葉なりと信ず。」神が他の聖典を世に出され，み手によってそれらを１つにすると約束されたことを知らずして，聖書を信じることのできる者は１人もいない。

「われらは，すべて神のこれまでに啓示したまいしこと，すべて今啓示したもうことを信じ，なお今より後，神の王国につきて多くの偉大にして重要なることを啓示したもうことを信ず。」言いかえれば，我々は絶えざる啓示とキリストのまことの教会が今も啓示により導かれていることを信じるのである。

そして，「われらは，イスラエル人は，文字通りに四方より集合し，その十支族の元に立ちかえることを信ず。われらは，シオンはこの(アメリカ)大陸に建てられ，キリストは御自ら地上に王となりて治めたまい。地球は元にあらたまりて楽園の栄えを受くることを信ず。」我々はこれらの事を知っている。イザヤは，その日が来た時には新しい天と新しい地が生まれ，そこでは小羊とししが共に住み，我々は家を建ててそこに住み，ぶどう畑を作ってその実を食べると語っている。（イザヤ65：17—23参照）

我々は無論のこと，福千年の間愛する人々と共に住めるように，聖なる神殿の土台に匹敵する基礎を置こうと願わねばならない。神が我々とその家族をそのように助けられんことを。その祈りと共に私の祝福をみなさま方に残す次第である。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。

告白し、罪を捨て悔い

この大勢の聴衆を見わたすと，階下にいる数多くの人々はみな神権指導者と監督たちである。

私は教会の監督たちと彼らの持つ多くの責任に多大の尊敬を払うものである。監督はワード部の父親，ワード部の管理大祭司であり，イスラエルの判士である。彼の判士たるつとめの中には，教会の役職につく資格や，教会の儀式を執行する資格，神殿推薦状を受ける資格などを判定することが含まれる。

ワード部の教会員の助言をし，問題ある会員を助け，罪人の告白に耳を傾け彼らの悔改めを援助することは，監督の義務である。不幸ながら，この最後に数えられる多くの人々はとがのために不活発になっており，人々にもっと注意を払ってあげる必要がある。彼らは自分の罪のために迷いを感じ，努力しても無駄だと思っている。今日私が特に話したいのはそのような教会員たちのことである。彼らは弱い時に，あるいはまわりの環境から，やむなく道をはずれてしまったが，みな我々の天父のすばらしい息子，娘である。今彼らは絶望と罪の意識の中で，よるべをなくしている。「どうなるというのだ。今の自分にはどうしようもない，私はゆるされるはずがない」という気持が彼らを支配する。彼らは，そのような人々に対して忍耐強く働きかける。監督の献身によって，救われるのである。彼らが望みのあることを知る時，神は慈悲深く，罪のゆるしが存在することを知る時，罪で押しつぶされた重い心に1筋の光が射し込む。

そのような人からある監督にあてられた1通の手紙を読んでみよう。それ以前に，少女は監督との心なごむ面接の中で自分の心を打ちあけていたのであった。監督はすべてが失われたのではなく，完全な悔い改めをするならば罪がゆるされると保証した。その数日後，彼女はこのような手紙を寄せたのである。

「重荷が取り去られるまでどんなに悪い状態であったか，監督は御存知ないでしょう。犯した罪を償うには時間がかかると思いますが，この感謝を監督や天のお父様に表わす一番の方法は監督が考えておられる私自身，そして神様がこうなれると知っておられる私自身になることではないかと思います。おかしなことですが，私は内心おそれていました。正確に言えば，おそれるというより，私たちがこの人生で行なうことは何と重大なのだろうと思っていました。人生はいつも私にいろいろなものを与えてきました。見ることができ，触れることができ，味わうことができ，喜ぶことができ，太陽を見，赤ちゃんの笑い声を聞き，子供たちの遊ぶ姿を見，人生の困難を克服していく人を見てきました。でもいつも赤ちゃんは泣き，子供たちはけんかをし，困難に負ける人がいます。私は，どうしてそんな考えになったのかわかりませんが，これが正しいように思えるのです。

てる一まことの改めのために

十二使徒評議員会補助
ジェームズ・A・カリモア

『私は望まぬ。夢も予言者の法悦も人をおうベールが突然引き裂れるのも天使の訪れも，開かれた天も。しかし主よ，私の魂の暗さを取り去れ。』（作者不詳）」

スペンサー・W・キンボール長老は私が先に述べたような状態について書いている。

「時に，罪の意識に押しつぶされ，悔改めたのちに過去を振り返り，罪のみにくさといまわしさを見て心を乱され，『主ははたして私をゆるして下さるのだろうか。私は自分自身をゆるせるだろうか』と思う人がいる。しかし人が失意の底に沈み，自分の立場に希望のないことを感じる時，無力な中からしかも，信仰をもって神に悲嘆を訴い願うならば，静かな細い，しかし心をさし貫くような声が自分の心にこうささやくのを聞くであろう，『あなたの罪はゆるされた』と。」（『赦しの奇跡』P.344）

聖典は大きな慰めを与えている。ヨハネ第一の手紙にこう記されている。

「もし，わたしたちが自分の罪を告白するならば，神は真実で正しいかたであるから，その罪をゆるし，すべての不義から，わたしたちをきよめて下さる。」（Ⅰヨハネ1：9）

またこのようにも記されている。

「すなわち，主なるわれは罪を見ていささかもこれを許すを得ざればなり。さりながら，悔い改めて主の誡命を行う者は赦されん。」（教義と聖約1：31—32）

おそらく罪人に大きな安らぎを与える聖句はそれであろう。「見よ，およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され，主なるわれもはやこれを忘るべし。」（教義と聖約58：42）

キンボール長老はこのことにつき，明快な論理を用いて述べている。「…罪を悔い改めよとの呼びかけは万人になされている。……その呼びかけは，応じる者に罪のゆるしを約束している。もしゆるしがないならば，人に悔い改めを叫ぶことはなんと馬鹿げたことであろう。また，それが救いと昇栄をもたらし得ないとしたならば，キリストの生涯は何という無駄であろう」（『赦しの奇跡』P.344）

イザヤは美しい言葉で，悔い改めるものすべてに赦しが約束されていることを述べている。

「あなたがたは主にお会いすることのできるうちに，主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ。悪しき者はその道を捨て……主に帰れ。そうすれば主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ，主は豊かにゆるしを与えられる。」（イザヤ55：6—7）

悔い改めは必ずしも容易ではない。大いなる謙遜さが必要であり，時には大きなとがのために，超人的な勇気が要求されることもある。しかし主は人が罪を悔い改めたかどうかはこのようにして知られるとはっきり言われた。

「人罪を悔い改めしや否やは，見よ，彼は自らこれを告白しその罪を捨つべければ，その悔い改めたることはこれによりて知るを得べし。」（教義と聖約58：43）

告白と罪を捨てることが，悔い改めの大切な二大要素である。人は自分のとがに気づき，それから離れようと決心したのち，謙遜になって告白をしなくてはならない。重大な罪を犯した場合，その行ないをやめるだけでだれにも言わないことははるかに容易である。しかし自らへりくだり，害を受けた人や監督にそれを告白することは，より謹厳な事柄であり，本当の謙遜さを要することである。

告白に続いて彼は主のいましめを誠実に守り，悔い改めたことをよい行ないをもって示さねばならない。また罪の償いも悔い改めの重要な一部である。彼は行ないにより害を被った人々に悔恨の気持と改心の決意を示して，失われたものを取り返し，被害を償うために，可能な限り賠償をすべきである。

ハロルド・B・リー大管長はそのことを美しい言葉で述べている。

「あなたの行ないによって一番害を受けた人にまず告白をしなくてはならない。証拠がはっきりしたあとで，ただ罪を認めることは，心からの告白ではない。もし『公然と多くの人々に対して罪を犯した』ならば，公然とそれ

らの人々の前で罪を認め，詰責を受ける覚悟と，謙遜と恥とを受ける心を示さねばならない。もしあなたの行ないがだれをも害さず自分だけを傷つけるものであるなら，あなたはひそかに告白をすべきである。そうすれば，隠された所においでになる天父は報いてくださるであろう。あなたの教会での地位や昇進，権能に影響するような行いは，主から羊の群れの牧者，イスラエルの判士として指名された監督にただちに告白すべきである。彼はそのような告白をひそかに聞き，正当に正義と慈悲をもち取り扱ってくれるであろう。告白に続いて，罪を犯した人は悪にみあう重さの，良い行為により，悔い改めの実を結ばねばならない。彼は力の及ぶ限りの償いをなして，取り去ったものは返し，損害は賠償しなくてはならない。」(「若人と教会」P.99)

人がとがを告白し，良い行ないによりゆるしを得たいという真心からの望みを示して，悔い改めを実行し始めたのち，いつゆるされたかを我々はどのようにして知るのであろうか。彼が本当に悔い改めたことを我々はどのようにして知るのであろうか。

1831年オハイオ州カートランドにおいて教会員に与えた啓示の中で，主は言っておられる。

「……誠にわれ汝らに告ぐ，主なるわれは死に当るべき罪を犯さずしてわが前に罪を告白し，赦しをわれに乞う者にはその罪を赦すなり。」

「この故にわれ汝らに告ぐ，汝ら互いに赦し合うべきなり。そは，人その兄弟の過ちを赦さざれば，その人主の前に罪に値する故にして，そは更に大いなる罪なお彼に在ればなり。主なるわれは，その赦さんと欲する者を赦す。されど汝らにはすべての人を赦すことを求めらる。」(教義と聖約64：7，9—10)

すべての人の罪を赦すべきであるという，教会員に与えられたこの明白な教えは，監督が教会員の告白を聞いたあとで，すぐに彼をゆるし，犯したとがの全責任を免除するということを言っているのではない。監督は無論彼をゆるすであろう。監督は彼を暖かくいだき，親切と理解を持ち，彼が再び活発になるようあらゆる尽力を惜しまないに違いない。しかし，監督は彼を愛し，理解しているにもかかわらず，その人のとがの重さに応じて一定期間教会における特権のいくらかを取りあげ「罪を捨てる期間」という罰を科せなくてはならないのである。

ある人が教会役員に「とがはいつゆるされるのですか」と尋ね，その兄弟は「悔い改めた時です」と答えたという。尋ねた人は再び「悔い改めたかどうかはいつわかるのですか」と質問した。すると兄弟は「あなたが人の心を見られるなら，わかるでしょう。おそらく，悔い改めは告白の時ではありませんか。でも私たちにはわからないことですから，福音に従って悔い改めたいことを表わす期間がなくてはならないのです」と答えた。

罪を捨て去る期間は，とがの重大さとその人の悔い改めの態度によって決定されるであろう。道徳的に重大な罪を犯した教会員がゆるされるようにと助けているあるステーキ部長にあてた大管長会の手紙の中に，次のような1節がある。

「告白と罪を捨て去ることがまことの悔い改めの要素であり，いかなる害についても可能な限りの償いと，主のすべての戒めに従うことが伴わなくてはならない。罪を捨てるに充分な期間が経過しているか否かについて疑問があるが，我々はその人が将来にわたって正しく生活できることを証明するには，さらに時間が必要であると思う。」

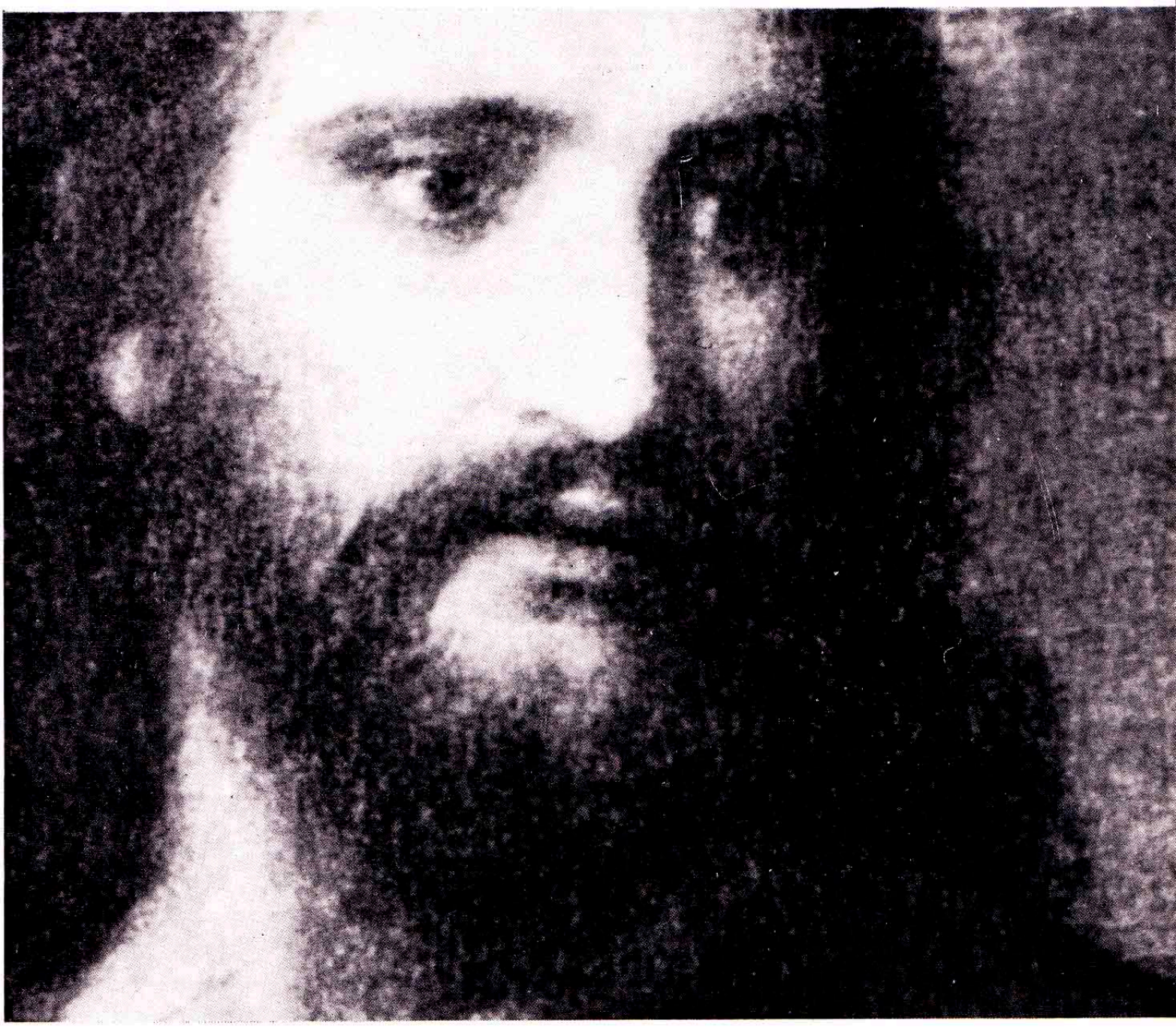
教会指導総合手引きには，重大なとがを犯したあとは，教会行事や神権についての特権を完全に受けるまでに，ある猶予期間を置くように指示されている。

しかし，罰が何であれ，その過程がいかに長くつらかろうが，またたとえ荒布をまとい灰をかぶってへりくだろうと，悔い改めはただ1つの方法しかない。

我々の罪はイエス・キリストの血の贖いにより，洗い流されることができる。アミュレクの言葉によれば，「ゼーズロムに告げて，主キリストはその民を贖うために必ず降臨したもうが，民を罪のあるままには贖いたまわない。その罪から民を贖うために降臨したもうと言った。もしも人々が悔い改めるならば，主はこれをその罪から贖う権威と能力とを御父から授かりたもう。」(ヒラマン5：10—11)

ここに，悔い改めた者がゆるされるとの確証がある。「誠に，主かくの如く言う。その罪を捨ててわれに来り，わが名を呼び，わが声に従い，わが誡命を守るあらゆる人々は，わが面を見てわれ在るを知ることあらん。」(教義と聖約93：1)

それは容易でないかもしれない。道は長いこともあろう。しかし私は，それが慈悲深い主が我々に備えたもうた道であることを証し申しあげる。イエス・キリストのみ名によって。アーメン。



「主はこう言われる」

十二使徒評議員会補助
セオドア・M・バートン長老

第141回半期総大会における説教

1カ月ほど前，私は大管長会から，各地で大会を開くようにと南米につかわされた。実を言えば，私はその土地についての予備知識を持っていなかった。私は南米の国々や人々を見た時，この上なく驚いた。

そこには超近代的な高層建築が立ち並び，いたるところに文明の利器がみられた。交通も北米の大都市と同様，混雑していた。発展する経済にこたえて，アパートや家々，会社，地下鉄，道路，工場が熱っぽいまでにひしめいていた。

率直に言って，私は南米の人々のとりこになってしまった。初めて行った時は知人が1人もいなかったが，暖かい歓迎を受けて，数週間後にそこを去る時には，新しいすばらしい友人を大

と述べた。ミカはそれが，地に騒乱と変動の満ちる末の時代に起こると言った。マラキは，エライジャの来訪とすべてのものの回復があると予言した。イエスは，使者すなわちエライヤスが主の再降臨に備えてあらゆるものを回復するためにつかわされるであろうと言われた。ペテロは，末の日に更新の時がやって来るであろう。また，「神が聖なる預言者たちの口をとおして，昔から預言しておられた万物更新の時まで」イエスは天にとどめておかれるであろうと述べた。(使徒３：21)

あらかじめ予言されていたこの回復は，非常に静かに，ひそかに始まったので，世の人はそのことに気づかなかった。それは「盗人が夜くるように」（Ⅰテサロニケ５：２）ひっそりと人知れずやってきた。それは人の知恵によってではなく，ニューヨーク州に住んだ少年ジョセフ・スミスがパルマイラに近い森へ入り，「どの教会が正しいですか」と尋ねた簡単な祈りに対する答えとしてやってきた。この少年は神の恵みと愛による新しい神権時代が始まるとは，みじんも考えていなかった。その当時地にはジョセフの質問に答えることのできる生ける予言者がいなかった。神がその質問に答えられるには，神御自身で答えられるしか方法がなかったのである。

神についての真の知識は，キリストの死後数世紀して失われてしまっていた。ジョセフ・スミスが森へ祈りに行った時，彼は神に関して人々と同じ知識しか持ちあわせていなかった。その時まで，キリスト教の教会はみな，神会を構成するのは御一方であると信じ教えていた。彼らは神を，認め理解することのできない霊の御方と信じていた。１人ではなく２人の御方が，素朴な祈りに答えて現われたもうたのを見た時のジョセフの驚きを，あなたがたは想像できるであろう。１人の御方がもう御一方をさして，「こはわが愛子なり，彼に聞け」（ジョセフ・スミス２：17）と紹介された。ジョセフに教えを授け，神の正しい知識を備えた新しい神権時代の扉を開いたのは，まさしく神の御子，復活された生けるイエス・キリストであった。キリストはジョセフに，当時世に存在していたどの教会も，主のみ名により語る権能を与えられていないと告げられた。そして，正しい備えをなし，神権の権能を授けられた後に，ジョセフはこの時代の生ける予言者たちの先駆けとなり，古代の予言者たちと同様人類に教えと祝福を宣すべきことを悟られた。

イエス・キリストの予言のごとくに天の使いたちが聖なる神権の鍵を持って地上を訪れ，ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリに神権の権能を授けた。み使いたちは彼らに，この末の時代についての神のみこころを知る権能を与えたのである。この同じ力が，まさに現代まで続いている。

すべての事柄が２人以上の証人によって確定する（Ⅱコリント 13：１ 参照）という言葉に従って，聖典が追加された。また，イエス・キリストの時代にあったと同じ正しい神権の手続きと儀式を回復するために新しい啓示が与えられた。イエス・キリストの教会が，以前の時代と同じ力，賜，権威をもって回復されたのである。神は再び神のみこころを知る賜を持ち，「主はこう言われる」と言う権威を有した代弁者を地上にたてられた。

ジョセフ・スミスが聖なる森で祈り終わって立ちあがった時には，神の属性と能力について博学の学者が一生を費しても見出し得ないほどのことを学んでいた。これが，今日のイエス・キリスト教会の特徴とするところである。この教会を他の教会とわけるものは，聖霊の証と力である。我々は学者を集めて神のみこころを論議する必要はない。我々を導く生ける予言者と使徒がいるからである。彼らの勧告に従うならば，我々は現代に存在する諸悪を避け，平穏な信仰とやすらぎを持つことができる。

このゆえに，末日聖徒イエス・キリスト教会には人の生活を良い方へ導く大いなる力が存在するのである。神の

と述べた。ミカはそれが，地に騒乱と変動の満ちる末の時代に起こると言った。マラキは，エライジャの来訪とすべてのものの回復があると予言した。イエスは，使者すなわちエライヤスが主の再降臨に備えてあらゆるものを回復するためにつかわされるであろうと言われた。ペテロは，末の日に更新の時がやって来るであろう。また，「神が聖なる預言者たちの口をとおして，昔から預言しておられた万物更新の時まで」イエスは天にとどめておかれるであろうと述べた。(使徒３：21)

あらかじめ予言されていたこの回復は，非常に静かに，ひそかに始まったので，世の人はそのことに気づかなかった。それは「盗人が夜くるように」（Ⅰテサロニケ５：２）ひっそりと人知れずやってきた。それは人の知恵によってではなく，ニューヨーク州に住んだ少年ジョセフ・スミスがパルマイラに近い森へ入り，「どの教会が正しいですか」と尋ねた簡単な祈りに対する答えとしてやってきた。この少年は神の恵みと愛による新しい神権時代が始まるとは，みじんも考えていなかった。その当時地にはジョセフの質問に答えることのできる生ける予言者がいなかった。神がその質問に答えられるには，神御自身で答えられるしか方法がなかったのである。

神についての真の知識は，キリストの死後数世紀して失われてしまっていた。ジョセフ・スミスが森へ祈りに行った時，彼は神に関して人々と同じ知識しか持ちあわせていなかった。その時まで，キリスト教の教会はみな，神会を構成するのは御一方であると信じ教えていた。彼らは神を，認め理解することのできない霊の御方と信じていた。１人ではなく２人の御方が，素朴な祈りに答えて現われたもうたのを見た時のジョセフの驚きを，あなたがたは想像できるであろう。１人の御方がもう御一方をさして，「こはわが愛子なり，彼に聞け」（ジョセフ・スミス２：17）と紹介された。ジョセフに教えを授け，神の正しい知識を備えた新しい神権時代の扉を開いたのは，まさしく神の御子，復活された生けるイエス・キリストであった。キリストはジョセフに，当時世に存在していたどの教会も，主のみ名により語る権能を与えられていないと告げられた。そして，正しい備えをなし，神権の権能を授けられた後に，ジョセフはこの時代の生ける予言者たちの先駆けとなり，古代の予言者たちと同様人類に教えと祝福を施すべきことを悟られた。

イエス・キリストの予言のごとくに天の使いたちが聖なる神権の鍵を持って地上を訪れ，ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリに神権の権能を授けた。み使いたちは彼らに，この末の時代についての神のみこころを知る権能を与えたのである。この同じ力が，まさに現代まで続いている。

すべての事柄が２人以上の証人によって確定する（Ⅱコリント 13：１ 参照）という言葉に従って，聖典が追加された。また，イエス・キリストの時代にあったと同じ正しい神権の手続きと儀式を回復するために新しい啓示が与えられた。イエス・キリストの教会が，以前の時代と同じ力，賜，権威をもって回復されたのである。神は再び神のみこころを知る賜を持ち，「主はこう言われる」と言う権威を有した代弁者を地上にたてられた。

ジョセフ・スミスが聖なる森で祈り終わって立ちあがった時には，神の属性と能力について博学の学者が一生を費しても見出し得ないほどのことを学んでいた。これが，今日のイエス・キリスト教会の特徴とするところである。この教会を他の教会とわけるものは，聖霊の証と力である。我々は学者を集めて神のみこころを論議する必要はない。我々を導く生ける予言者と使徒がいるからである。彼らの勧告に従うならば，我々は現代に存在する諸悪を避け，平穏な信仰とやすらぎを持つことができる。

このゆえに，末日聖徒イエス・キリスト教会には人の生活を良い方へ導く大いなる力が存在するのである。神の

みこころを行なっていると自覚している男女は，他の人のために犠牲を払い奉仕し，わかちあい，共に平和に生きるであろう。平和は，法律や特定の政治思想によってもたらされるものではない。問題を解決する際，経験不足や知識のなさから誤ちを犯したり，力を誤って使ったりすることがある。平和や喜びや幸福は神の啓示された生活を受けいれることによってのみもたらされるのである。

私は南米で，過去3年間に合衆国西海岸およびカナダでみたと同様，教会の急速な発展を見た。我々の問題は教会に空席ができることではなく，教会堂から人々があふれることである。我々は必要にこたえて教会の建物を続々と建設しているが，いつまでたってもこの問題はなくなりそうにない。私は南米における教会の建物が日曜日だけでなく週日にも使われていることを，うれしく思った。若人たちは毎日のように，建物やグランドをクラブの集会所のようにして使っていた。グランドでフットボールを，文化ホールでは劇やミュージカルのリハーサルを行ない，教室ではセミナリーや初等協会が開かれていた。私はブエノスアイレスで若者たちの夕食会に出席した。モンテビデオでは始まったばかりのデゼレト産業の工場を訪問して姉妹たちが友好を暖めながら，縫い物や衣料の更正や編み物や織り物の練習をしているのを見た。ブラジルのサンパウロでは，世代の相違もなく老若入りまじって，運動場新設のために働いていた。

あなたがたは，「異国人であるあなたが，言葉の通じない国々でそのような暖かい歓迎を受けたのは，いったいどういうわけか」と考えることであろう。それは，イエス・キリストに私が彼らの兄弟として受けいれられたからである。我々は心の中で，同じ言葉を話しているのである。我々は同じ理想同じ望み，同じ目標を持っている。私はブラジルの大会で，集会を始めるのがいささか困難と思われるほど，楽しそうに語りあい，あいさつしあっている教会員たちの姿を見た。彼らは互いに愛しあっていた。彼らは，南米の人々の中でも最も笑顔に満ちて友情に富んだ幸福な人々であった。そのような兄弟愛のあるサンパウロの3つのステーキ部が，毎年1千人ほどの改宗者が主の家族に加わるという程急速な勢いで成長することは，不思議であろうか。それらの人々があのように幸福そうにむつまじく交わっているのを見た時，私は，回復された福音は何と力あることかと思った。男が自分はまさしく神の息子であると確信した時，女が自分はまさしく神の娘だと知った時，その人の成長に限界はなくなる。これが我々の教会員の持つ根本的な思想である。高貴な家族の一員となった我々はもはや他の男女と同様であることに満足しない。我々は違いを感じるのである。我々は，主のみわざを行なっている限り，成功を拒むものは何もないことを知っている。我々は自分が何者であるかを知っているので，進んで力の限り働き，犠牲を捧げ，他の人々と才能や祝福をわかち合うのである。ペテロは当時の教会員に次のように教えた。

「しかし，あなたがたは，選ばれた種族，忠実なる神権者，聖なる国民，神につける民である。それによって，暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを，あなたがたが語り伝えるためである。あなたがたは以前は神の民でなかったが，いまは神の民であり，以前はあわれみを受けたことのない者であったが，いまは，あわれみを受けた者となっている。」（欽定訳Ⅰペテロ2：9—10）

勇気を失った時，迷う時，より明るい光と，喜びと幸福を求める時，これら啓示された真理を学びなさい。あなた自身で見出しなさい。予言者の声に耳を傾けなさい。神の民に加わって真実の生ける神の誓約の息子，娘となりなさい。天の王国にゆずりを得，血統につける権利を受け，人生の真の目的を知りなさい。すでにイエス・キリスト教会の会員となっている人々は，内にある賜を育てようではないか。他人への親切を行ないに移し，真理の原則を真心より受けいれることから来る隣人への愛を示そうではないか。

私はあなたがたに，神は生きておられ，イエス・キリストは神の生ける御子，我々の救い主，我々の主，王であるとの神聖な証を申しあげる。私は，イエス・キリストは今，この時代に生ける予言者たちを通して地の住民に語っておられると証する。メルケゼデク神権がその権威と権能のすべてをもって再び地上に回復され，「主はこう言われる」と言うことのできる真の使徒と予言者が現在生きていることを証する。

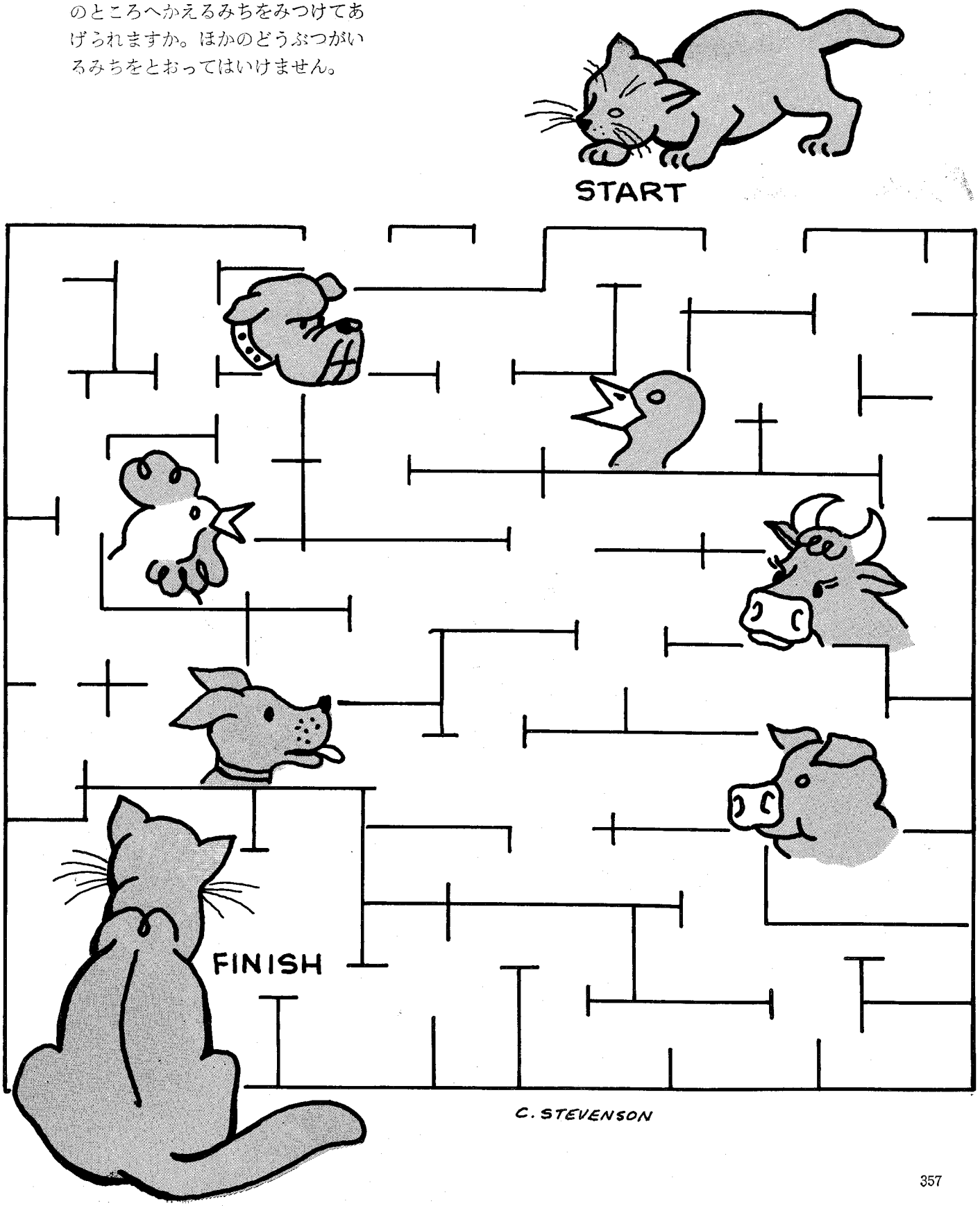
私はこれらの証をイエス・キリストのみ名によって申しあげる。

アーメン。

まいごのこねこ

シャーロッテ・スティーブンソン

あなたは，このこねこがおかあさんのところへかえるみちをみつけてあげられますか。ほかのどうぶつがいるみちをとおってはいけません。



信じるための勇気とは

アン・スイックスタッド

フィンランドのラルスモのひどく寒い日曜日の朝のことでした。若いアンダース・ヨハンソンは教会へ行こうと彼の家を出ました。彼は厚着をして暖かかったので，寒さなど気になりませんでした。そして小さなバプテスマ会会場までの5キロメートルの道のりを歩くことは，彼には楽しいことでした。アンダースは神様について学ぶことが好きだったので安息日は心がはずみました。

急にアンダースはすねに石をぶつけられました。その次は彼の背中に命中しました。彼は問いただそうともせずに，すぐさま原っぱを横切って走りぬけ，その場から立ち去りました。ほんのちょっと前までの浮き浮きした気持は，いっぺんに吹き飛んでしまいました。

なぜ彼らは私が違う教会に属しているということで私に石を投げつけるのだろうと，アンダースは思いました。私は彼らと違う礼拝をするけれども，彼らと同じこの村に住んでいるのに，と悲しくなりました。

この当時，フィンランドはロシアの勢力下にありました。そして人々はルーテル教会に属していました。アンダースのように他の教会に属している人のほとんどが，迫害を受けていました。彼は石を投げつけられても実際にはひどいけがをしないですみましたが，どんなにアンダースはラルスモの近くの人々が他の宗教に対して寛大であってくれたらなあと思ったことでしょう。

アンダースが小さい時，スウェーデンに住んでいたグスタフ・ウォーレンという名前の若い男の人が末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になりました。その後まもなく彼はロシア政府の下で働くため，フィンランドへ送られて来ました。しかしスウェーデンを去る前に，彼はフィンランドの人々にこの教会の福音を教え，彼らにバプテスマを施すために長老に聖任されました。グスタフは確かにフィンランドにおける

最初のモルモン教徒でした。

1875年の終りごろ宣教師たちが，スウェーデンからフィンランドに送られて来ました。フィンランド政府は，公にルーテル教会以外のどの教会の活動にも反対しました。そして人々が他のどんな宗教の教義も，立って教えることを禁止する法律が通過しました。フィンランドで人々を改宗させようと働いていた宣教師のすべては，法律に従って，福音を教える間はすわらなければなりませんでした。これらの最初の宣教師からの手紙は，この異常な説教の仕方は「私達がすわることに慣れてからはうまくいきました」と報告しています。

フィンランドでは，ほんのわずかの人々だけが新しい宗教について話す人の言葉に耳を傾けました。そうした人々は，しばしば迫害され，試みられ，そして法律の名のもとになしうる最も残酷な罰を受けました。この教会の会員になった1人の男の人は28日間の投獄を宣告され，そして孤独な監禁生活の間中ずっと少しばかりのパンを食べ，水を飲むことを許されました。1880年の夏にスウェーデンからいく人かの宣教師がラルスモへ来ました。ラルスモは，フィンランドの西海岸から遠くおよそ25キロメートル離れた島です。政治的にむずかしいこともあって，彼らはラルスモに長くは滞在しませんでした。しかしアンダースと彼の妻はその福音を知り，そして宣教師がラルスモを去る前にバプテスマを受けました。しばらくの間，彼らだけがこの島における唯一のこの教会の会員でした。

アンダースはまもなく他の人々とそのすばらしい福音の教えを分ち合いたいと思いました。そこで彼は，このすばらしい，新しい宗教について知ってもらうため，彼の家に友達や親せきの人々を招待しました。郵便配達である彼の義理のおとうさんといく人かの近くの人々が，この福音を信じ，そしてアンダースにバプテスマを施してくれるようにたのみました。

「私は，みなさんにバプテスマを施すことができるかどうかはっきりわかりません」と，アンダースは答えました。「私は，私がそうする権威を持っているかどうか確めるためにスウェーデンの伝道部長のところへまいります。」

しかし船でスウェーデンに行くには，たいへん費用がかかりました。彼から福音を学んだ人々は，アンダースが長老に聖任されるためにスウェーデンに行くのに必要なお金を寄付しました。

1946年7月，フィンランドのラルスモで，再び伝道が始まりました。そして1947年にこの国は，伝道地を開きたいという宗教にその門を開きました。

その後まもなく，フィンランド伝道部が組織されました。1972年現在，そこには教会の23の支部があります。

アンダースは自分が正しいと信じる教会で福音を学びました。どんな迫害にもたえた彼の勇気は，友達や近くの人々と同様に，彼のたくさんの子供や孫をもこの教会に導く力となったのです。フィンランド伝道部の最初の支部長は，アンダース・ヨハンソン・ストロンバーグの孫のアンセルム・ストロンバーグです。そしてそのストロンバーグという名前はフィンランドにおいて「姓をつけよ」という法律が成立した時からずっと今日にいたるまで，この一族の姓として用いられています。

マーベル・ジョーンズ・ガボットによるモルモン経物語

ギデオン

絵：ジェリー・ハートソン

ギデオンは，群集の中でひときわ高く見えました。ギデオンは大きくてたいへん強い人でした。その声は大きくてリムハイ王の民とアンモンとその民に聞こえました。レーマン人のどれいであったリムハイ王の民は，そこからのがれる方法を見つけ出そうというリムハイ王の呼びかけに答えて集まっていたのです。

「ああ，王様。もしあなたがこれまでに私の言葉に耳を傾けられて，その言葉が役に立っていたならば，こんども私の言葉に耳を傾けていただきたいと思います。そうしていただけるなら，私はこの民をどれいの身から救い出しましょう」とギデオンは言いました。

みんなの目がギデオンに注がれました。リムハイの民はどんなに自由を望んでいたことでしょう。レーマン人はリムハイの民にだんだんひどいことをするようになり，人々を殺したり，彼らをけもののように追い払ったり，すでに重い税をかけていたにもかかわらず，さらに重い税をかけたりしました。

リムハイ王は熱心にギデオンの話を聞きました。その当時リムハイ王はレーマン人にとらえられていたのです。リムハイ王は悪いノア王の息子でしたが，リムハイ自身はりっぱな人なので人々に愛されていました。昔，ギデオンはノア王を殺すと誓いましたが，ノア王が命ごいをしたのでその命を助けたことがあったことをリムハイ王は思い出しました。リムハイ王は2年の間リムハイの民とレーマン人の間が平和であったことをうれしく思っていました。

まだ荒野にいたノア王の悪い祭司たちは，レーマン人の娘たちが歌ったり踊ったりするのをかくれて見ていました。彼らは24人の娘をさらい，荒野の奥深くにつれて行きました。レーマン人は少女たちをさらったとリムハイの民を非難しました。そこでリムハイ王は自分の民の中から犯人を捜そうと思いました。しかしギデオンは次のように言いました。「この町の人々をお調べにならないようにお願いします。みんなはそのようなことはしてないでしょう。あの悪い祭司たちを覚えていらっしゃいますか。」リムハイ王はギデオンが言ったことを聞き入れました。やはりギデオンの言ったとおりだったのです。アンモンとその民もギデオンの言うことを聞きたいと思いました。というのは，アンモンはギデオンがリムハイ王に真心から仕えているのを知っていたからです。アンモンは，何年も前にニーファイの地に移り住んだゼニフの子孫を捜すために，ゼラヘムラの地からニーファイの地へ来ました。アンモンはリムハイ王とその民が生きていることを知って非常に喜びましたが，リムハイ王たちがとらわれていることを悲しみました。さてリムハイ王たちはギデオンが何を言うかと待っていました。

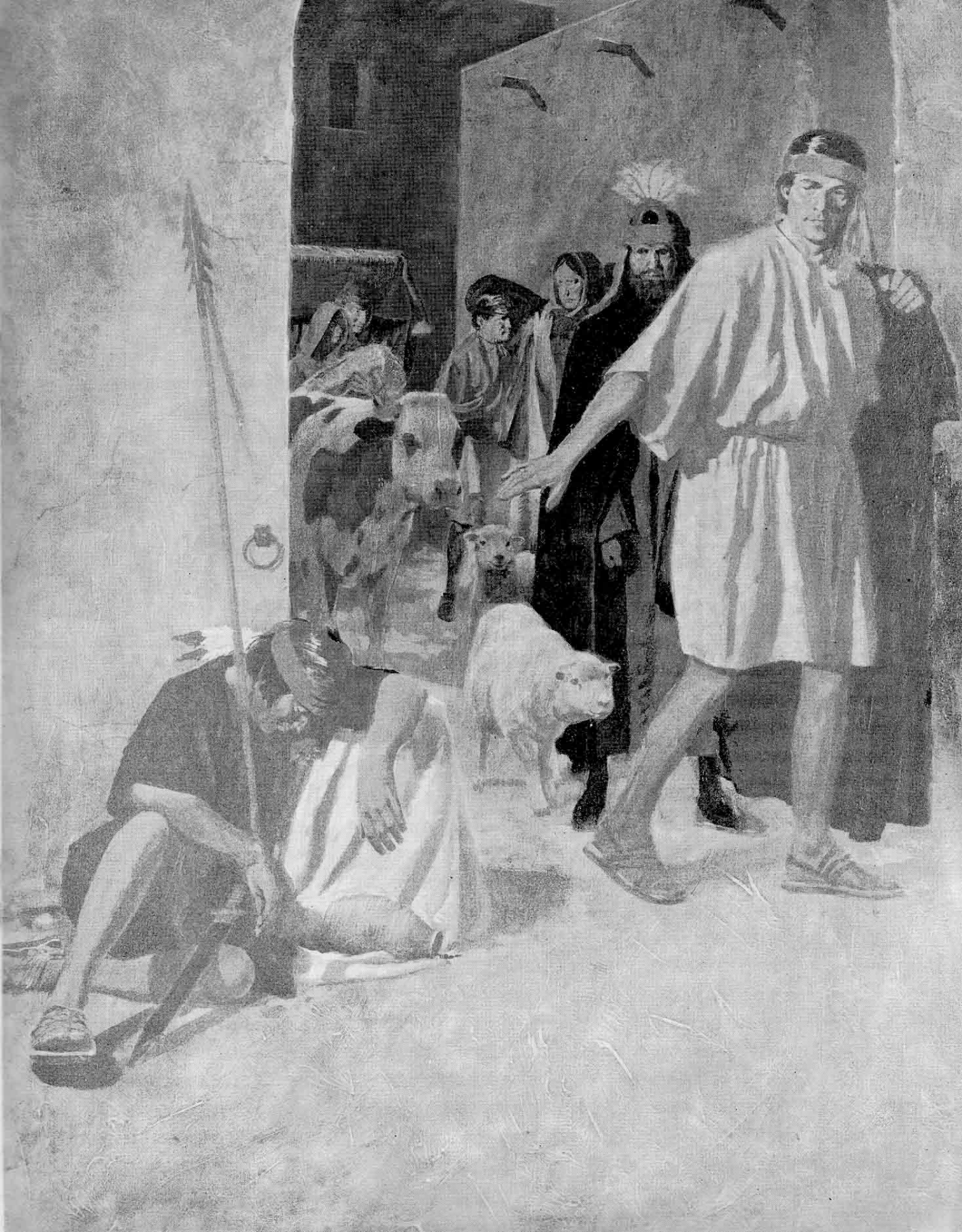
リムハイ王はギデオンが話すのを許しました。

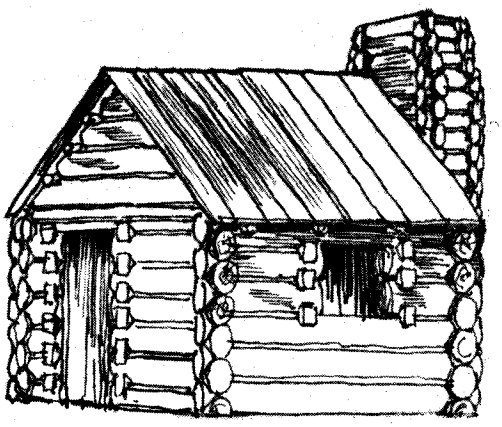
そこでギデオンは次のように言いました。「町の裏側に，城壁を通りぬける道があるのをおぼえておいでですか。レーマン人の番兵はそこをあまり警戒していません。彼らはたいてい夜，酒によっています。わが民にふれをまわして家畜の群れを集めさせ，夜中までにこれを荒野へ追い立てて行かせましょう。さて私は王の命令に従い，最後のみつぎ物であるぶどう酒をレーマン人におさめます。彼らがそれを飲んで，よって寝入っている間に，私たちは彼らがいるところの左側にあるわき道を通って外に出ます。こうして私たちは女，子供といっしょに家畜の群れを連れて荒野へのがれ，シャイロムの地をまわって旅をするのです。」

リムハイ王はギデオンの計画に賛成しました。すべての民は家畜の群れと身のまわりのものを集め，家族に旅の準備をさせました。ギデオンはレーマン人に贈り物として，いつもよりたくさんのぶどう酒をさし出しました。するとレーマン人はそのぶどう酒をえんりょせずに飲み，やがて眠りこんでしまいました。

そしてリムハイの民はその夜裏道を通って荒野へのがれ，アンモンとその兄弟たちにみちびかれてゼラヘムラの地に向かって旅をしました。やがてゼラヘムラの地で彼らはモーサヤの民に喜んで迎え入れられました。

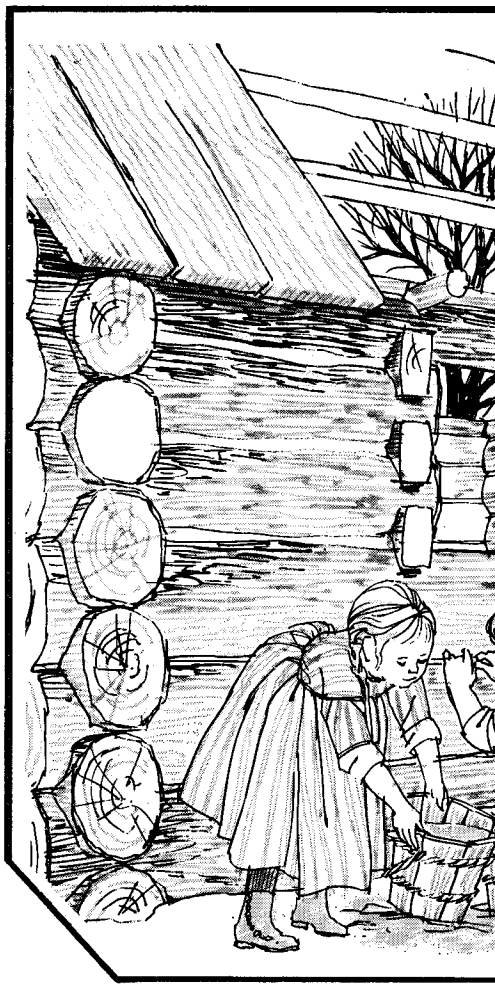
ギデオンはレーマン人からリムハイの民を救ったのです。





新しい家

メアリー・プラット・パリッシュ
絵：バージニア・サージェント



トミーは荷馬車の中にしいたわらぶとんの上で寝返りをうって，つぎはぎ模様に作った掛けぶとんを耳のところまでかぶりました。いつもの朝だったらラッパの音がひびいているので，もうとっくに起きているはずでしたが，指導者の兄弟たちがガーデン・グローブにとどまることに決めていたのでけさはまだ寝ていることができました。

しかし，やはりけさもすみきったラッパの音色がトミーの耳に聞こえてきました。急いで彼はくつをはき，上着をつかんで荷馬車の外に飛び出すと，テントから出て来るおとうさんに出合いました。

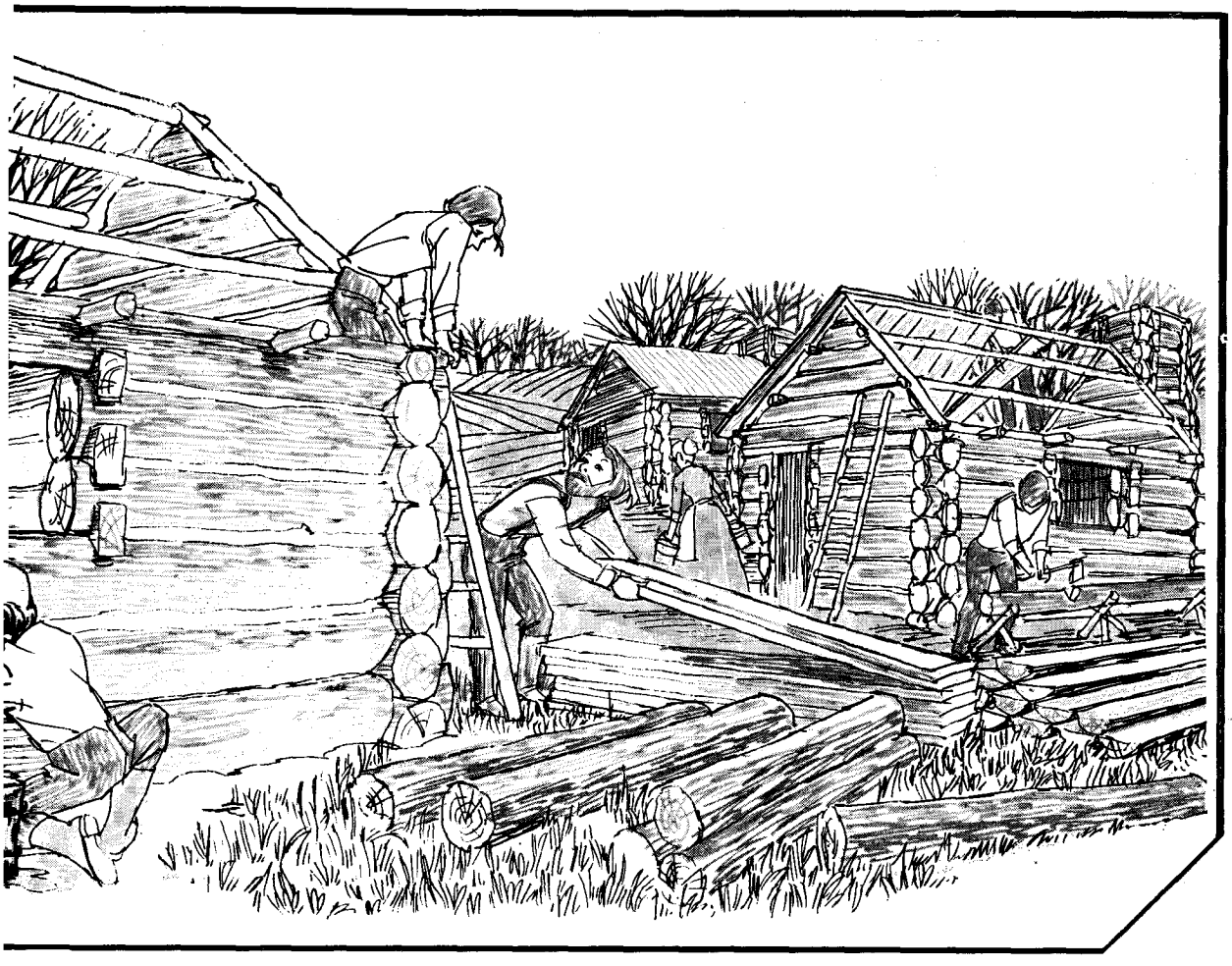
「どうしたの？」トミーがたずねました。

「さあ，どうしたのかな」とおとうさんは答え，「何があるのか行ってみよう」と言いました。

2人はいっしょに大きなたき火のところへ行きました。そこではブリガム・ヤングがキャンプの人々が集まるのを待っていました。全員がそこに集まるとブリガム・ヤングは話し始めました。「今日は4月25日でもう土地を耕やすのに良い時期です。私たちは今穀物をうえたら，秋にはたくさんの収穫があると思います。もし私たちがそれまでここにとどまらないとしても，後から来る聖徒たちが収穫することができます。病気の人々は病気が良くなるまでここで休むと良いでしょう。長い旅をするためにじゅうぶんな食料と衣類がない人たちは，必要なものが手に入るまでここにとどまってよいでしょう。私たちの後に来る聖徒たちは旅行を続けることができるようになるまで私たちの家を使うことができます」と言ってから，彼は息をつきました。人々は次に彼が何を言うかと思い，シーンとなって彼の言葉を待ちました。

「私はキャンプをグループに分けようと思います。100人は木を切り48人は家を建て10人はへいを作り，12人は井戸を掘ります。そしてさらに10人は橋をかけます。残りの175人は原野を切り開き，木製のすき作り，それから穀物をうえます。」

トミーはヤング大管長が話し終わるとすぐにおかあさんのところへ走って行き，その新しい計画について話しました。「それはお互い助け合うのにとてもよい方法ね」と，おかあさんは言いました。「もしノーブーにいる人たちが，ここには食料があって，病気の



ときにはここで休めるということを知ったら西部に移って来るかも知れないわ。」

「もしこのことを知ったら，たぶんみんな来るよ。」トミーはノーブーにいたころ友達と楽しく遊んだことを思い出しながら目を輝かせて言いました。

「ここにあの人たちがはいれるような家があるってどうやってあの人たちに知らせるの」とベッツィーがたずねました。

「指導者の兄弟たちが知らせると思うわ」とおかあさんが答えました。

ちょうどその時おとうさんがこれからする仕事に胸をおどらせながら，キャンプの中に入ってきました。「私は家を建てるんだ。」おとうさんはうきうきした声で話し，「トミー，お前も手伝っておくれ」とトミーに声をかけました。

「ワー」トミーは，思わず叫びました。トミーのおかあさんは，この2人がいっしょに歩いて行くのを笑顔で見ていました。

何週間も忙しい日が続きました。毎朝キャンプの人たちはラッパの音で目がさめました。だれもが朝食を食べ終わって，朝のお祈りがすむと，すぐ仕事に取りかかりました。2週間もしないうちに，そこには家が立ち，へいが作られ，橋がかけられ，井戸が掘られ，まるで長い間人間が住みついていた小さな村のようでした。そのまわりには耕して平らにされた小麦畑が，ありました。

トミーとベッツィーは，収穫には，パイやケーキが食べられると思いました。2人がとうもろこしの粉ではなく本当の小麦粉で作ったパンを食べたのはずい分前のことでした。彼らは時々それを食べるよりはよいと言って，おなかをすかせたままで寝てしまうほどとうもろこしにはあきあきしていました。

トミーは自分で手伝った家のことを考えるとうれしくなりました。それらの家は丸太を積み上げて作ったものでした。トミーの仕事は丸太のすき間に

泥と草をつめることでした。トミーとベッツィーがおとうさんやおかあさんといっしょにその家の1つに引っ越して来た日はとてもしあわせでした。おとうさんは部屋の中央におくテーブルと，いくつかの長いすを作り，また部屋のかたすみに荒けずりのベッドのわくを作りました。ベッツィーとおかあさんは細い長いロープをベッドの前後左右に編んでスプリングを作りました。その編み目は6センチ四方になりました。

「ベッドが，やわらかくてふかふかするわ。」ベッツィーはそれにこしをおろしながら言いました。

「かたい板の上で寝るよりいいね。」トミーは荷馬車の中のベッドを思い出して言いました。

いろいろな物を置き終わった時，ベッツィーは，新しい家をぐるっと見回しました。暖炉には火が燃え，肉入りのシチューは炉の上でぐつぐつにえていてテーブルには夕食のために用意されたきれいなテーブルクロスがかかっていました。「すてきな家だわ，ここに長い間住めるようになったらいいわ！」と彼女は言いました。

しかしトミーとベッツィーはその家にたった3週間住んだだけでした。6月1日，おとうさんはトミーたちに，「私たちはけさカウンシル・ブラフスに出発しなければならないんだよ。ヤング大管長は，私たちがカウンシル・ブラフスへ行ってここでしたように穀物をうえてほしいとおっしゃっているんだ。」

トミーとベッツィーは，かなしそうでした。おかあさんは，「私ちたはいっしょにいる限り，どこに住もうとそんなこと問題じゃないわ。家庭を作るのは人々が住む場所ではなくてお互いが持っている愛なのよ。今，大切な事は，天のおとう様が望んでいらっしゃることを行なって，私たちがどんなに天のおとう様を愛しているかを示すことよ」と言って彼らをなぐさめました。

家族は次の日の朝その家を去るために荷造りを終わると，その場所での最後の食事をしました。急に，たくさんの荷馬車の音がしました。「あれは私たちに加わるためにやって来た荷馬車隊にちがいない」とおとうさんは言いました。そして家族の人たちは食べるのをやめて，新しく来た人々にあいさつしようと，道に飛び出して行きました。

トミーはその荷馬車の1台に，何人かの友達がいるのを見ました。「エリザ，エライジャ」彼は大声で呼びました。新しく来た人たちは振り向くと，歓声をあげ，荷馬車の外に飛び出してトミーとベッツィーの方へ走って来ました。おとうさんはエリザとエライジャの家族を夕食に招待しました。おかあさんはベッドの準備をしてエリザのおかあさんが横になれるようにしてあげました。ベッツィーは，おかあさんとロープスプリングを作ったのでベッドがとても寝ごこちがよいだろうと思うとうれしくなりました。

その夜，荷馬車の中のベッドに寝る前に，トミーは「ぼくはエリザとエライジャがぼくたちの家に住むことになってうれしいよ」と言いました。

「私もよ。あの人たちがこんなすてきなお家に住むなんてうれしいわ」とベッツィーは言いました。

方針と手続き

伝道部渉外代表者

教会のほとんどの伝道部には，新聞その他の報道機関と接触をはかる渉外代表者がいる。そのために，伝道部長は可能な限りその地域の教会員の援助を仰ぐべきである。

祝福師の祝福

祝福師がしばらくの期間ステーキ部を離れたり，死亡して祝福を受けられなくなったステーキ部の教会員は，監督およびステーキ部長の推薦を受けて，勧められた近くのステーキ部のステーキ部祝福師から祝福師の祝福を受けることができる。そのような場合に，受ける人が祝福師のステーキ部まで出向くべきである。そのために祝福師が自分のステーキ部を離れて他のステーキ部へ行ってはならない。新しい祝福師が指名されたり，祝福師が健康を回復したり，旅行から戻ってきて働くことができるようになる時まで，この方針に従うべきである。

メキシコの教会学校

メキシコの学校管理役員ジョージ・L・ターリー兄弟によれば，メキシコ共和国内の教会学校の今年度登録生徒数は，7,615名である。メキシコの法律にもとづき，学校は教育文化協会という意味のSociedad Educativay Cultwal. S. A. と名付けられた法人組織となっている。メキシコ最大の教会学校は，連邦地域の北部メキシコシティー近くにあるCentro Escolan "Benemerite de las Americas" である。そこの収容可能人数は4,500名であり，登録は2,000名である。

コーラ飲料と知恵の言葉

教義と聖約89章の知恵の言葉は，今もそこに記される通り言葉も事項も変わってはいない。知恵の言葉には，教会初期の兄弟たちに「熱き飲料」はお茶とコーヒーを意味すると述べられた以外，公の説明がなされていない。コーラ飲料に関して教会は公的に立場を言明してはいないが，教会指導者は以前から，そして現在は特に，習慣性を持つ害になる薬品を含んだ飲料をとらないように勧告している。体を害する成分を含む飲料は避けるべきである。

月曜日は教会活動を行なわず，家庭の夕べのためにとっておくこと

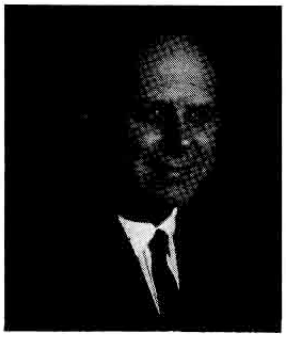
神権会報1970年9月号の，月曜の夜は家庭の夕べを行なうべきである，との発表の中に，次のように記されている。

神殿の活動，若人のスポーツ活動，学生の活動など，神権プログラムや補助組織プログラムの責任者は，月曜日の夜は家族がそろって家庭の夕べを行なうことができるように，全教会を通じて教会活動を行なわないようにという決定に注意するべきである。

ワード部あるいは支部の家庭の夕べのような集まりは，家庭の夕べと銘打たれているため月曜日に行なってもよいと考える人があるが，いかに良い会であっても，そのような活動は他の日に計画するべきである。

もし良いと考えられるならば，監督あるいは支部長の指示のもとに，独身者が集まって家庭の夕べを行なってもよい。またもし良ければ，親類同志家族が集まって家庭の夕べを行なうこともできる。

ささいな決定



七十人最高評議員会会員
A・セオドア・タトル

あなたは驚くかもしれない。人生には大きな決定というものはないのである。さほど重大でない決定が幾つも重なって現在の我々がある。

なぜ私がそのように言うかといえば，１つの理由がある。私は，予期せぬむずかしい決定に遭遇したある少年を知っている。彼は15歳になる年の夏の終りにその問題に出くわした。夏中同じ州に住む叔父の農場でアルバイトをして帰ってきたばかりの時であった。

彼は家に帰ってからはじめて聖餐会に出席した。集会が終ってから，何かの用があり，彼は数分その場にひきとめられた。彼が教会の外へ出ると，友人たちはグループになって立っていた。彼が近づいて行くと，何やら話がまとまったらしい様子であった。グループに加わった彼は，一見何ともない質問を受けた。「君もぼくらといっしょにやるかい？」

彼は「何を？」と尋ねた。

「ちょっぴりビールを飲むんだ」

その答えは彼にとって大きなショックであった。彼はそのようなことを考えてみたこともなかった。グループの友だちはいい少年ばかりであった。彼は，その質問はまったく突拍子もないことだと思った。彼の知っている友人たちらしくないことであった。夏中友だちと離れて過ごしたが，その時の彼は以前の彼とそう変わっていなかった。しかし，何かが起きて友人たちは変わってしまったのであった。彼らは前より大人になって世なれたように思えた。その驚きは，返事をする前に，彼をたじろがせた。一瞬のうちに心にいかに多くの事柄が思い浮かぶことか。彼らは少年の友人であった。敵ではなかった。彼は一人一人をよく知っていた。初等協会や日曜学校にいっしょに出席し，共に歌い，同じ日曜日にいっしょに執事に聖任された者もいた。幾度となく聖餐のパスを行ない，学校でも仲良く活動をした。模型飛行機を作ったり，ゴムのピストルで遊んだ者もいた。こんなに単純な質問で，いい仲間たちとの仲に水をさされて良いものだろうか。

自分の年令では，友だちや知人が非常に大きな位置を占めている。友だちと「同じに」なりたいという気持がある。それに，遊びをいやがって女々しいと思われたくはない。その上，もしいやだと言えば，自分１人が仲間と対立してしまう。

このような考えが彼の脳裏をかけめぐったが，心には別の考えが強く根ざしていた。どんなにやりたいことでもしてはいけないという理由があった。それは正しくないのである。自分の内から勇気がわきおこり，彼は「いやだよ。ぼくは行かない」と答えた。

グループは，通りを越えて，計画通りビア・ホールの方へ向かって行った。友である少年は，ひとり立ちつくしていた。彼は「人がひとりでいるのは良くない」という主の言葉を思い浮かべなかったであろうが，その言葉の意味を自分なりに新たに理解したことであろう。彼はそれ以後，その言葉の真実なことを理解し，我々には正しいことを信じて守る真実の友が必要なわけを知ったのである。

彼は16歳になるのも間近い少年であったが，家に向かいながら，涙を浮かべていた。母親が何かのあったことを感じて彼に尋ねた。

「どうかしたの？」

彼はついいましがたの経験を話してしまった。

「あなたは正しいことをしたのよ。」母親は彼を力づけた。

少年は，「そうだといいんだけど」と答えた。

母親が再び，「あなたは正しい決定をしたのよ。あなたはきっとわかるでしょう。祝福されますよ」と言った。

その出来事があってからの日々は，そう楽しいものではなかった。気持をたてなおさなくてはならなかったし，新しい友だちもすぐにできるわけではなかった。学校で以前のグループに入ろうとすると会話がぴたっとやむことは，どうしようもなくつらいことであった。高校と近くの工業デザイン所の往復は，さびしいものであった。以前によく楽しんだスポーツなども，せいぜいユーモアをとばす程度に変わっていた。バスケットボールの練習の時も，クリアーになってパスをする時に，他の人なら球をもらおうとするのに自分の時にはだれも受けとろうとしないことが，何回かあった。

しかし，だれでも知っているように，時が何よりもその思い出をいやしてくれた。昔の悲しかった思い出はだんだん薄れていき，心の傷はなおっていった。

やがて以前の友情が，前とは違った形で戻ってきた。１年余りたって，彼はセミナリー生徒会長に選ばれ，翌年には校内の指導者となった。

そして２年後，彼はクラスでただ１人，伝道に出た。同級生の人が翌年また伝道に出たが，彼の友人たちは１人も伝道に出なかった。

そのあとも，青年は教会で数々の責任に召され，働いている。すべての人と同様，彼の道徳標準や生き方を試みる試練は，人生に何回となく訪れた。しかしどのような試しであったかよく覚えてはいないし，印象深く心に残るようなこともなかった。

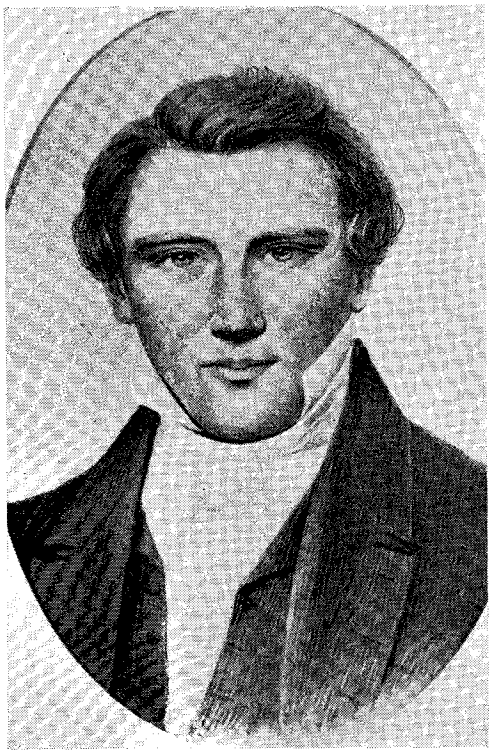
彼はとりたてて大きくもない経験の中で，正しいことを選んだ。そして母親たちがそうであるように，彼の母親は正しかった。彼女の言葉はそのまま成就したのである。「あなたはきっとわかるでしょう。祝福されますよ。」

類なき
ジョセフ・スミス

レオン・R・ハートショーン

1844年6月29日，その日は暖かい日であった。

一隻の船がミシシッピー川の馬蹄型にわん曲した岸に近づいて来た。その岸には1つの市があった。その船に乗っていたひとりの旅行者は地図の上でその市を捜そうとしたが，ほんの数年前に印刷されたものであるにもかかわらず，その地図には出ていなかった。彼はそれがノーヴー市であることを聞いた。船は短時間そこに立ち寄ることになっていた。



1843年ノーヴーにおいて撮映されたものと推定される。予言者ジョセフ・スミスの初期の銀板写真から描かれた。

船は接岸し，その旅行者は，人々が長い列をつくって川のそばにある大きな家に入るために待っているのを見て興味をもった。急ぎ旅でなかったので彼はノーヴーに一晩滞在するつもりであると船長に告げた。

その人々の列の後ろに近づくと，人々は悲しみに打ちひしがれた様子であった。婦人たちや多くの男性が泣いていた。

そこで彼はひとりの人に近づいて言った。「すみませんが，この列は何ですか。」

するとその人は，驚いて彼を見あげた。「ご存じないのですか。」

「たった今，船でここに着いたばかりの者なんです。」

「あゝそれで。私たちは，2日前に殺されたジョセフ・スミス中将とその兄弟であるハイラムの遺体を見るために待っているのです。」

「スミス中将ですって」と，その訪問者はいぶかし気に言った。

「そうです。彼は5,000名の兵を持つノーヴー軍団の中将です。」

「彼らのほかに何人殺されたのですか」と，その訪問者は尋ねた。

「それだけです。おそらくジョセフはそのために死んだのです。彼は敵が彼の命だけをねらっていると考えていたのです。彼が死ねば，血に飢えた者たちは満足して残った私たちを殺さないだろうと彼は考えていました。ジョセフは兄のハイラムには生きていてほしかったのですが，ハイラムはジョセフのそばに残ると言いはったのです」

「どんな問題が原因で彼らは殺されたのですか」

「ええ，『ノーヴー・エクスポジター』紙を論ばくしたというのがその理由です。その新聞社はジョセフに反対する者たちが所有しており，彼らは中傷と扇動的な記事を書き，偽りを告げていました。そして，ジョセフ・スミスに対する憎悪をかきたてようとしたのです。そこで，その新聞の発行停止の命令が市議会とジョセフ・スミス市長から出されました。」

「ジョセフ・スミスはこの市の市長もしていたのですか。」

「はい。」

「この町はとても新しいでしょう。私の地図に出ていませんよ。」

「ええ，新しいです。6年前には，ここには沼しかありませんでした。」

信じられないというふうに，その旅行者は頭を振った。「美しい市ですね。川をのぼってきた時，農場と家畜の囲いが町の外にあるのを見ました。」

「ええ，ジョセフはそのように市を計画したのです。」

「ジョセフがこの市を計画したのですか。」

「はい，そのために，ほとんど農夫のこの市の人々は便利な生活を送ることができます。また，私たちは一緒に

交わり，お互いから学ぶことができるのですよ。」

次にその旅行者は，広くてまっすぐな通りとしっかりと建てられた家々に心を向け，建築中の大きな建物が何であるのか不思議に思った。するとそれは神殿であり，市の最も見晴らしの良い地に建てるようにジョセフが設計したと告げられた。

「ジョセフ・スミスが神殿を設計したですって」と，彼は叫んだ。そして言った。「あなたは私に，彼がどうして死ななければならなかったか話しているのですよ。」

「ええそうです。『エクスポジター』の話ですね。でも，問題はずっと以前に始まったのです。ジョセフが古代の記録を翻訳した時からです。」

「彼は翻訳者だったのですか。その古代の記録の翻訳で何が起こったのですか。」

「それは出版され，モルモン経と呼ばれています。」

「ほかにも何か出版したのですか。」

「ええ，教会の大管長として……」

ジョセフがクモラの丘から金版を持って帰った時金版を入れるためにとハイラムがこの箱をジョセフに渡した。この箱はアルビンの持ち物で，表に彼の名前が彫られており，現在でもはっきりと読める。

「教会の大管長？」と，その訪問者は叫んだ。

「そうです。末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長です。ここのノーヴーにいる人はほとんどみな，教会員です。大管長として彼は『教義と聖約』を出版しました……」

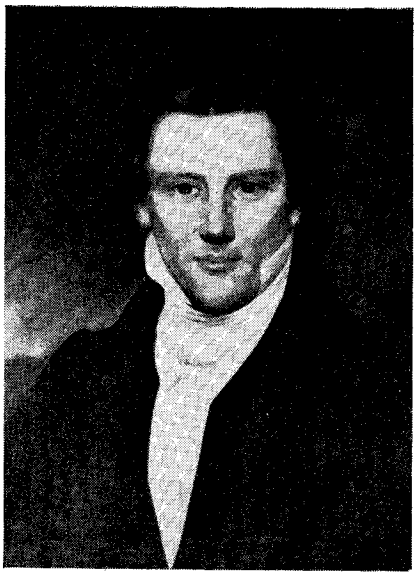
予言者の愛用した椅子

彼は驚いて尋ねた。「それはどんな本ですか。」

「予言者ジョセフ・スミスに与えられた啓示の書です……」

「予言者ジョセフ・スミスですって。」

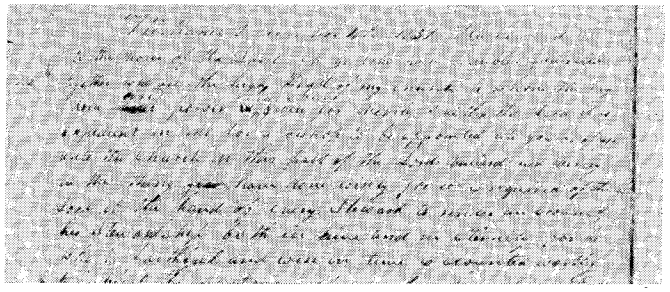
「はい。彼は若い時に，父なる神と復活された御子イエス・キリストが現われて，彼と話をされました。実際に迫害が始まったのは，ジョセフが大きな喜びと熱意を持って隣人にその示現を見たことを告げた後です。ジョセフだけでなく，彼に従うすべての人々も迫害されました。あなたがここで会うある人々は，そのためにニューヨーク州やオハイオ州，ミズーリ州の家から追い出されたのです。ミズーリ州で被った損害に対して，私たちは全く償いを受けませんでした。ジョセフは賠償を得るように努めましたが拒否されました。彼が合衆国の大統領候補となっ



ジョセフ・スミスの初期の銀板写真から描かれた画

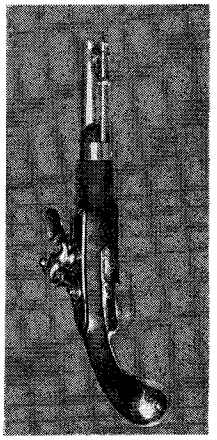
ノーヴー軍団の予言者の制服につけられたベルトのバックル

ジョセフ・スミス自身の手になる教義と聖約72章の最初の写し



ジョセフとハイラムのこの版画はヨーロッパとアメリカで広く発行された。

初版のモルモン経



予言者のピストル

た第１の理由はそれです。」

「合衆国の大統領候補ですって。」彼は当惑して叫んだ。

送葬者は続けた。「ジョセフが不承不承家族に別れを告げ，神殿と自分の農場を見つめて『これは最も美しい地，天が下で最もよい人々である』と語ったのは４日前でした。それから，彼は敵に身をまかせるためにカーセージの役所がある地に馬車で向かったのです。その時彼は『わたしは今ほふり場に引かれてゆく子羊のようである。しかし，私の心は夏の朝のように穏かである』と言って出かけたのです。彼は保護と公平な裁判を約束されたのですが，２日前の６月27日に，顔を黒く塗った100名以上の一団がその牢獄を襲いました。そして数分後にジョセフとハイラムは死にました。」

「彼は何歳でしたか。」

「38歳です。」

その訪問者は信じられない様子を示し，心の中で考えていた。「中将，翻訳者，著者，市長，予言者，教会の大管長，市の計画者，建築家，大統領候補。このジョセフ・スミスとはどんな人だろう。」

以上の場面は仮想のものである。しかし，多くの人々はジョセフ・スミスについてこれらのことを考えたことがあるであろう。17歳の時にジョセフに与えられたモロナイの予言は成就し，彼の名前は「あらゆる国民，あらゆる血族，あらゆる国語の民の中に善くも悪しくも覚えられ，あらゆる人々の中に善くも悪しくも」語られてきた。（ジョセフ・スミス２：33）

文明社会には，モルモンとジョセフ・スミスについて聞いたことのない人々が住む所はほとんどない。4,000年前に，エジプトに売られたあの有名なヨセフは語っている。「しかしてかの聖見者には私と同じ名がつけられ，またその名は彼の父の名をとってつけられる。また主がこの聖見者の手によって起したもうことは，主の能力によってわが民を救うものであるから，この聖見者は私に似た者であろう。」（Ⅱニーファイ３：15）

主であり救い主であるイエス・キリストと我々の罪を贖う主の犠牲に関する多くの予言を除くと，実際末日にジョセフ・スミスによって開始される業の予言は聖書の予言としては他のいかなるものにも増して多い。

ジョセフの死後，主は次の言葉を書き留めて聖典に含めるように命じられた。「主の予言者にして聖見者なるジョセフ・スミスは，ただイエス・キリストを除くのほか，この世に生を受けたる何人よりもこの世に於ける人類の救いに尽したり。」（教義と聖約135：３）

ジョセフ・スミス，Jr. について今までに聞いたり，読んだりしたことのない人はあまりいない。彼を知っている人々はその生涯と生涯の出来事を引用する。また末日聖徒を愛し関心を抱

いてきた人々は，100年以上にわたって絶えずいろいろな事実を集めてきた。

あなたが普通の末日聖徒の読者であれば，最初の示現や金版とその翻訳について記録された話をすでにほとんど知っていることであろう。アロン神権とメルケゼデク神権を回復したバプテスマのヨハネおよびペテロ，ヤコブ，ヨハネの訪れ，またその他過去の有名な人々，すなわちアダム，ノア，モーセ，エライジャ，エライヤスその他の実際の訪れについての話も知っていることであろう。あなたは，数百に及ぶ啓示，モルモン経とアブラハムの書，教会の多くの教義，ジョセフが救い主の名を付けて設立した組織である末日聖徒イエス・キリスト教会，およびバプテスマから神殿の儀式まであなたの救いのためにあるこの教会の儀式について知っている。また，その他数多くの事実や話，史実などを知っていることであろう。

では，何か新しく知ることのできるものがあるだろうか。新しいだけでなく，ここで取り上げるに十分な価値と意義のあるものがあるだろうか。何かあると思う。多くの学者やその他の人々が多くの事実や話を集めてきたが，新たな気持ちで調べると，新しい視野が開けてくるのである。

予言者の署名があるカートランド
セイフティーソサイエティー銀行紙幣

我々は6巻に及ぶ教会歴史記録を読み，そこからジョセフが家族についてまた家族をどのように世話し，愛したかについて記した箇所を捜してきた。

次の文は，教会歴史記録から順不同に抜き出したものである。あなたがジョセフ・スミスについてこれまで何を聞き，また何を考えてこようとも，これは人生に実際に関連する何かを新しい方法で提示するものであると思う。これは我々を取り巻くすべての人々に相対する方法を示している。

妻エマについて

「…私は愛するエマに手を伸べた時言い尽くし難き喜びと，胸にふくらむ喜悦を味わった。彼女は私の妻でありまた私の青春の妻であり，心の悦びである。経験するように命じられた多くの出来事をしばらく思いめぐらすと，私の心には多くの事柄が思い出された。時折起こった労役や労苦，悲しみや苦しみ，喜びや慰め，これらは我々の人生行路にふりかかり，我々の結び付きに報いを与えた。おお，その時に私の心に何といろいろな思いが交錯したことであろう。妻は今再びここにいる。7度目の困難にもかかわらず，不屈で，確固としており，動揺することなく，変わることのない，愛情深いエマ。」（5：107）

「エマと一緒に馬車に乗って農場へ行った……その日の残りの時間は家で過ごした。」（5：307）

「夕方，エマと一緒に馬車で出かけた。」（5：360）

「エマと一緒に，店まで歩いて行った。」（5：21）

「いろいろな事柄についてエマと話すことによりほとんど午前中を過ごした……幸福な気持ちと非常な楽しさを味わった。」（5：92）

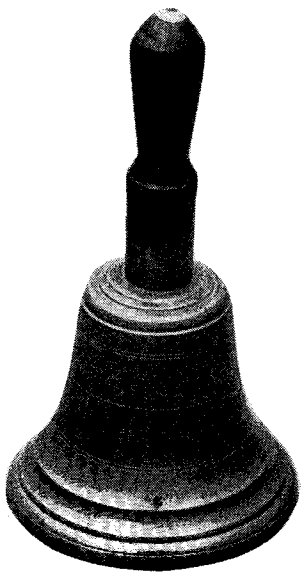
「買物をするために，妻を連れてウイローフビーまで馬車で行った……」（2：290）

「エマと一緒にそりで出かけた。」（6：170）

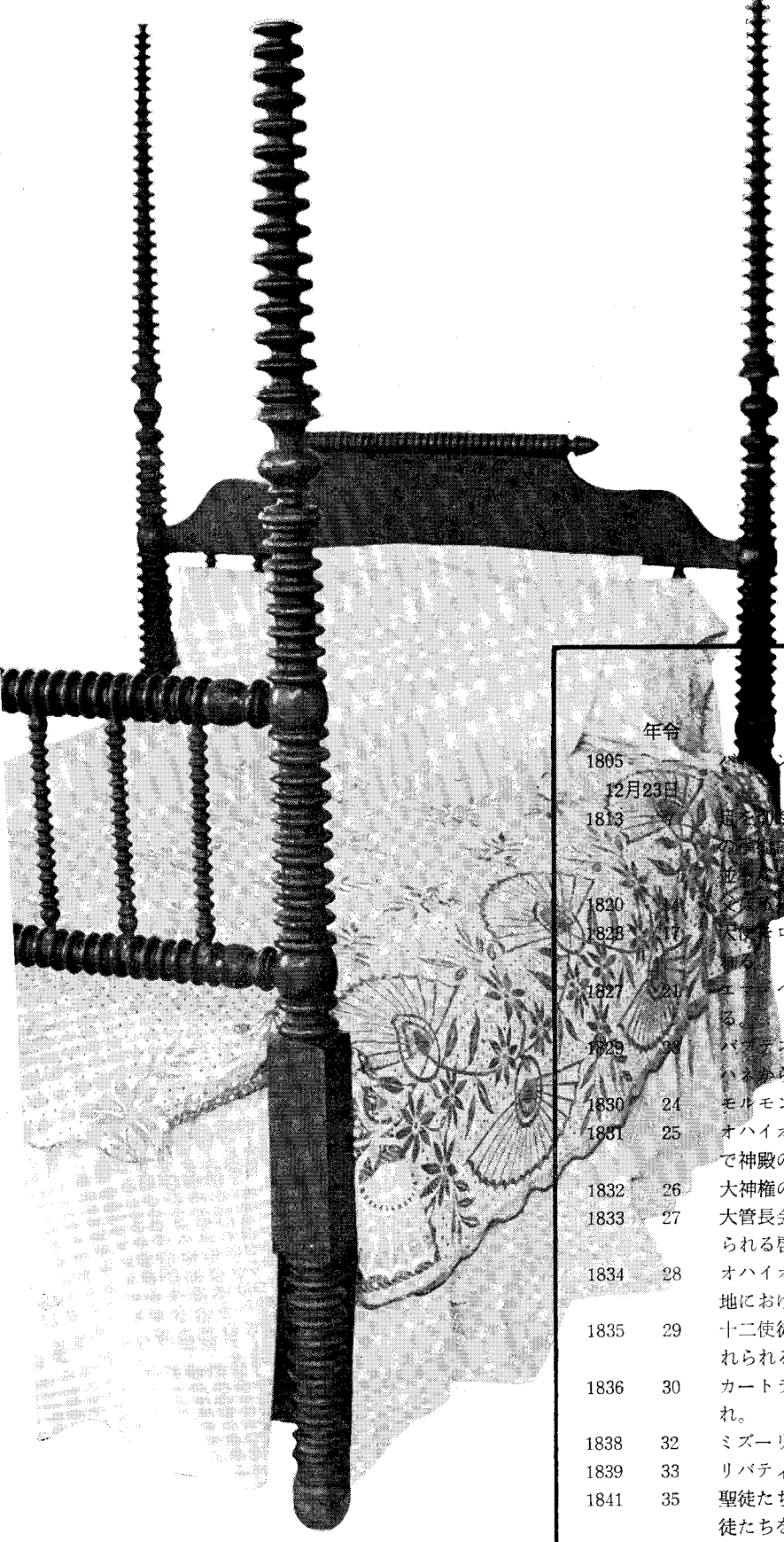
「集会の後，エマと出かけた。木々は芽吹き始めていた。」

「午後，エマと一緒に出かけた…桃の木が美しい。」（6：326）

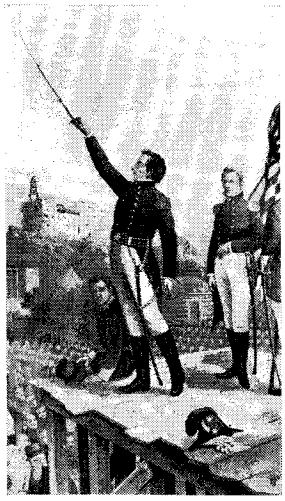
「今日，エマが病気になり，熱が出始めた。終日家にいて，彼女のそばに



夫と子供たちを畑から呼び戻すために予言者の母が使った夕食の合図の鐘



バーモント州の予言者の
家のベット

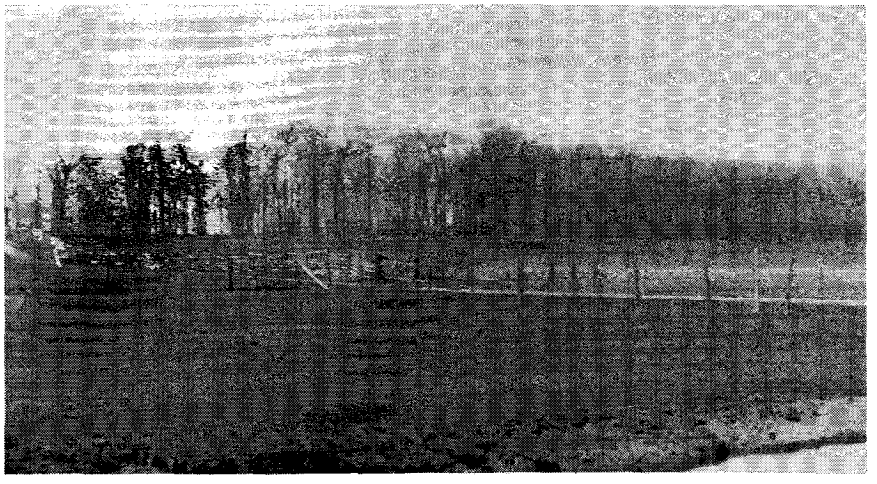


1844年の春の予言者の
「最後の公式演説」を描いた絵

ジョセフ・スミスの略歴

(1805—1844)

年令		
1805		バーモント州シャロンで生まれる。
12月23日		
1813	7	足を切断するような病いに見舞われたが，骨を一部切開するだけの手術によって救われる。この時，生涯の特質とも言うべき並みはずれた勇気とやさしさを示す。
1820	14	父その御子イエス・キリストにまみえて話を交わす。
1823	17	天使モロナイの訪れを受け，ニーファイ人の記録の存在を告げられる。
1827	21	エマ・ヘールと結婚する。金版の管理を任される。翻訳を開始する。
1829	23	バプテスマのヨハネからアロン神権を受け，ペテロ，ヤコブ，ヨハネからメルケゼデク神権を受ける。
1830	24	モルモン経の出版。教会を設立する。
1831	25	オハイオ州カートランドへ移る。ミズーリ州インディペンデンスで神殿の敷地を献納する。
1832	26	大神権の長に支持される。
1833	27	大管長会を組織する。多くの啓示を受ける。知恵の言葉として知られる啓示を受ける。
1834	28	オハイオ州からミズーリ州までシオンの陣営と共に行く。両方の地における聖徒を立てるために多大の努力を払う。
1835	29	十二使徒と七十人が聖任される。教義と聖約が聖徒たちに受け入れられる。
1836	30	カートランド神殿を献堂する。イエス，モーセ，エライジャの訪れ。
1838	32	ミズーリ州へ移る。リバティーの獄へ投獄される。
1839	33	リバティーの獄中より教会を指導する。ノーヴーの建設始まる。
1841	35	聖徒たちのノーヴー集合に関する命が出される。ヨーロッパの聖徒たちを合衆国へ移住させる機関を計画する。
1842	36	アブラハム書を出版する。やがて起こる聖徒たちのロッキー山脈への移住を予言する。
1843	37	反モルモンの抑圧と法の圧力が強くなる。永遠の結婚に関する啓示を記録する。
1844	38	午後5時15分少し過ぎに，カーセージの獄で兄のハイラムと共に
6月27日		銃撃されて殉教する。



ジョセフ・スミスが少年時代に目にしたと思われる聖なる森。

ついていた。」（5：166）

「エマはあまり良くならない。終日彼女のそばにいた。」（5：166）

「エマは少し良くなった。終日彼女のそばにいた。」（5：167）

「エマはまた非常に悪くなった。私自身も少し気分がすぐれない。」（5：169）

「愛するエマの容体はさらに悪くなった……私も気分がすぐれないし，エマのことが心配である。」（5：167—8）

「エマは少し良くなった。私もさわやかな気持ちで気分が良い。」（5：169）

「……エマはゆっくり回復にむかっている。」（5：169）

「エマの健康のために一緒に神殿に行った。彼女は急速に良くなりつつある。」（5：187）

「エマと一緒に神殿に出かけた。」（5：183）

子供たちについて。ジョセフとエマには，幼少の時に死んだ子供が6人いた。その内の5人は実子であり，1人は養子の息子であった。また，成人した子供も5人いた。4人は実の息子であり，1人は養女であった。しかも，最後の子供は予言者の死後5カ月して生まれた。

「子供たちと一緒に農場に行き，暗くなるまで帰らなかった。」（5：182）

「夕食後，妻と子供たちを連れて出かけた……」（2：297—8）

「午前中，子供たちを馬車に乗せて楽しい遠乗りをした。」（5：369）

「一日中，家族と一緒に家で楽しく過ごした……」（2：345）

「家にいて，家族と共に非常に楽しい日を送った。」（2：45）

「家族内の言葉使いを教えるためにファイアサイドをして，夕べを過ごした。」

「午後4時に私自身の運動として氷すべりをするために，フレデリックと一緒に出かけた。」（5：265）

父親が病気の時，彼について次のように記している。

「父を訪問し，彼が非常に弱っているのを知った……」（2：288）

「家にいた。非常に心配しながら父の看護をした。」（2：289）

「家にいた。父に付き添っていた。」（2：289）

母親について

「母が私の家に来た。」（5：271）

「一日中家にいた。母が肺炎になり母を看護した……」（5：290）

「母の健康のために，彼女とそのほかの人たちを連れて乗馬で出かけた。」（6：65）

「まだ病気である母の世話をするために終日家にいた。」（5：298）

兄弟に対して次のように愛ある言葉を記している。

「ハイラム……私は死よりも強い愛で彼を愛している。私は1度も彼を非難したことはないし，彼も私をしかったことはない……」（2：338）

アルビン：「私は胸いっぱいになった悲しみをよく覚えている。彼が死んだ時，私の幼い心は張り裂けるほどであった。」（5：126）

ドン・カルロス：「彼は麗しく，気だてがよく，親切で，徳高く，信仰深く，正直な子供であった。彼の霊が行く所に私の霊も行こう。」（5：127）

順不同にあげたこれらの文で十分であろう。ジョセフ・スミスに関する話をする以上に，彼が愛情深く，世話をよくし，他人のことを案じる人であることがよくわかる。彼は忙しすぎて人々のために何かができないような人では決してなかった。例えば，家族のためにはよく尽した。

後年，パーレイ・P・プラットは次のように書いている。「父と母，夫と妻，兄弟と姉妹，息子と娘の親愛な関係を重んじる術を教えてくれたのはジョセフ・スミスであった。」

我々はみな，現在一緒に生活している家族，あるいはどこかで生活している家族を持っている。ジョセフ・スミスが家族全員をどのように気づかっているか洞察し，今年あなた自身でそれを試みてごらんなさい。あなたが行なって始めて，あなたと家族に非常に大きな幸福がもたらされるのである。

質疑応答

この記事は，教会の教義を教えるためではなく，読者にとって参考となり何らかの助けを与えるためのものである。

「『あなたの隣り人を愛せよ』，とはどういう意味ですか」（マタイ 22：39）

これは，人がキリストの福音について尋ねるうちで，最も大切な質問でしょう。イエスは，この考えを宗教生活の中心に置かれたし（マタイ22章）パウロはもし愛がなければ，いっさいは無益であると述べています。（Ｉコリント13章）

神のみが愛の完全な意味をご存じです。しかしわれわれは，福音の中心となるこの教えに対する理解を深め，より一層それに沿って生活しようと望むことはできます。

兄弟愛を定義づけるのは容易ではありません。愛には多くの種類があるので，兄弟愛はこうではないと否定することから始めましょう。兄弟愛はロマンチックな愛ではありません。つまり，異性の誰かに感じる強く激しい感情ではありません。ロマンチックな愛は人の生物学的性質に基づいているもので，たとえそれが理想的なもの高揚されたものとして経験されるにしても，それは兄弟愛ではありません。他の種類の愛によって高められなければ，ロマンチックな愛は，不安定で，気まぐれで，利己的，所有欲が強くて，しっと深く，ねたみがちなものになりやすいものです。それとは対照的に，パウロはキリスト教徒としての愛について，それは，「ねたまず」「自分の利益を求めず」と語っています。

兄弟愛，それは友情の一部でありうるかもしれませんが，友情と同意語ではありません。互いの交友関係を喜ぶ友人同志は，秘密を守りあい，忠実で，信頼がおけ，互いに多くの関心を分けあいます。友情は互恵的なものです。

兄弟愛はロマンチックな愛や友情よりも更に非利己的なものです。キリスト教徒としての愛をもつ者は，他人の福祉に心からの関心をいだきます。他人の利益のために自分の生命をも失います。キリスト教徒の生活は変わる，すなわち他の自我が中心になります。愛を示された人が，その愛に感謝しようが，しまいが，あるいはその愛にこたえようが，こたえまいが，問題ではありません。なぜなら兄弟愛はそれ自身培われていくからです。兄弟愛は愛する人の側に全面的に存在しており，ロマンチックな愛や友情のように，その存在を保つのに，愛した相手の反応を必要とはしません。

人に兄弟愛があるかどうかは，イエスが例証された次の言葉によって真にためされます。「あなたの敵を愛し，あなたをのろう者を祝福し，あなたを憎む者に良き事をなし，あなたを恨み迫害する者のために祈れ」。（マタイ５：44欽定訳より和訳）

兄弟愛は，他の二つの種類の愛と違って公平であり，したがって普遍的です。兄弟愛をもつ者は，どのような人にでも，すなわちすべての人に関心をいだきます。罪人であろうと聖徒であろうと。魅力があろうとなかろうと。信仰，種族が同じであろうとそうでなかろうと。事実，もし誰かが，人を選んで愛するようなことがあればその人は兄弟愛で愛す機会を失っているのです。

兄弟愛はあらゆる種類の愛のように，本質は感情的で情緒的なものです。しかしまた，知的な要素ももちあわせています。敵対する者，反発する者に善良さを求め願うのには，反省と自己修養が必要です。それゆえ兄弟愛は，学び続けられてゆかねばならないと信じます。兄弟愛はロマンチックな愛のように，自然に人の心を打つようなことはありません。それゆえまた，あらゆる愛のうちで，最も安定しており，永続するものです。

人は，誰かを愛すると，その人の命令はすべてきかねばならないと誤解します。両親は否ということや，はっきりものをいうことを恐れたりします。人は，特に若者は，相手の感情を害したり，愛していないと思われるのをこわがって，自分の良き判断とは裏腹に，同僚や仲間の言うことに屈してしまいます。兄弟愛は正義と一致して，確固不動のものをもち，他人に関心をいだくなら，時には叱責さえもするのです。私はある学生を現実にまともに立ち向かわせる助けをするのに，勇気をふるって，自分に確固とした信念を持って相

手にあたった時，愛について最も素晴しい経験をしたことがありました。

兄弟愛とは，哲学者カントの言葉によると，決して他人を自分の目的に利するよう扱うことではなく，他人の目的のために働くことです。その意味で，商売において，交際において，結婚において，学校において，また仕事において，われわれは，他人を単なる働き手として，われわれ自身の目標を果たすための道具として扱い，濫用してはならないのです。かえって，われわれは，他人を全人格者として扱い，その関心に注意を払い，黄金律を実行せねばなりません。

「隣り人を愛せよ」という言葉は，今なお福音の基本的な教えであり，また人類存在のための根本的おきてです。技術的進歩により人が相互に緊密になるにつれ，一層隣り人を愛してゆかねばならないのは厳然たる事実です。もしそうでなければ，この地球での生活は，ますます困難なものになるでしょう。

ローエル・L・ベニオン
ユタ大学学生副部長

「私の友人は前世の存在について，聖書にはなんら決定的な証拠が述べられていないと言っています。この点について明らかにして下さい」

主題について聖書に述べてあることを話し，その証拠が決定的なものでないかどうか判断してもらうことにしましょう。

1．**イエスはこの世に来られる前に存在しておられた。**使徒のヨハネは，キリストを言葉が肉体となりたるもの（ヨハネ１：14参照）として述べているが，その著書の冒頭で次のように証している。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」（ヨハネ１：１）言葉をかえて言えば，初めにキリストがおられた。またキリストは神と共におられ，キリストご自身もまた神であられたということになる。しかし今の時点で，われわれが目的とする重要な点は，単に「初めに」キリストがおられたということである。

また使徒パウロはモーセの時代，すなわち，キリスト降誕の1200年以上も前に，イスラエルの子らが，「彼らについてきた霊の岩から飲んだのであるが，この岩はキリストにほかならない」（Ｉコリント10：４）と言っている。

もし救い主の前世の存在を証拠だてるのに，互に聖書による証拠が必要であれば，イエスが十字架にかかられる前の晩に，ご自身が述べられた言葉に注目したらよい。イエスは，前世でうけた栄光を明らかに切望されて，次のように祈られた。「父よ，世が造られる前に，わたしがみそばで持っていた栄光で，今み前にわたしを輝かせて下さい。」（ヨハネ17：５）

このように，イエスが，この世に来臨されるはるか以前に存在しておられたことがわかる。さて，ここで，救い主以外の人々も，前世の霊の生活を送っていたことを聖書が教えてくれるかどうかみてみよう。

2．**エレミヤはこの世に来る前に存在していた。**啓示によって予言者エレミヤは，自分の霊の前世の存在についていくらかを学んだ。主はエレミヤに語られた。「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに，あなたを知り，あなたがまだ生まれないさきに，あなたを聖別し，あなたを立てて万国の予言者とした。」（エレミヤ１：５）

上の聖句が述べているように，主はエレミヤが生まれる前に彼をご存知であり，エレミヤが生まれる前に彼を聖別し，たてられたので，エレミヤがこの世に生を受ける前に存在していたことは明らかになるに違いない。

3．**ヨブはこの世に来る前に存在していた。**ある時，主は予言者ヨブに次のように尋ねられた。「私が地の基をすえた時，どこにいたか。もしあなたが知っているなら言え。」

「かの時には明けの星は相共に歌い，神の子たちはみな喜び呼ばわった。」（ヨブ38：４，７）

さて，主はヨブに，地の基が置かれる前にヨブがどこにいたかを告げられなかったが，この質問は，ヨブがどこかに存在していたこと，ヨブのみではなく，「すべての神の子ら」もどこかに存在していたことをほのめかしている。そこで，聖書が，われわれは神の子である（パウロは使徒行伝17：29で「神の子孫」という呼び方をしている）と教えていることを想起すると，われわれは，この地球が創造される以前，ヨブと共に（またエレミヤや主イエス・キリストと共に）存在していたと結論せざるを得ないのである。

4．**イエスは，使徒らが人間の前世について表明しており，それを正そうとはなさらなかった。**ヨハネによる福音書第９章で語られている一つの出来事から，この結論が導かれる。一人のめくらについて使徒らはイエスに尋ねた。「先生，この人が生れつき盲人なのは，だれが罪を犯したためですか。本人ですか，それともその両親ですか。」（ヨハネ９：２）使徒たちの質問が，単にこの盲人の男の両親が，彼が生まれる前に罪を犯したかどうかを尋ねているばかりではなく，この男自身が，生れる前に罪を犯したかどうか尋ねていることに気をつけて欲しい。この質問は，使徒たちがこの男がこの世に生まれる前に存在していて，罪を犯す可能性があったのを信じていたことは明白である。

イエスはこの男も両親も罪を犯していないと説明し，（第３節）

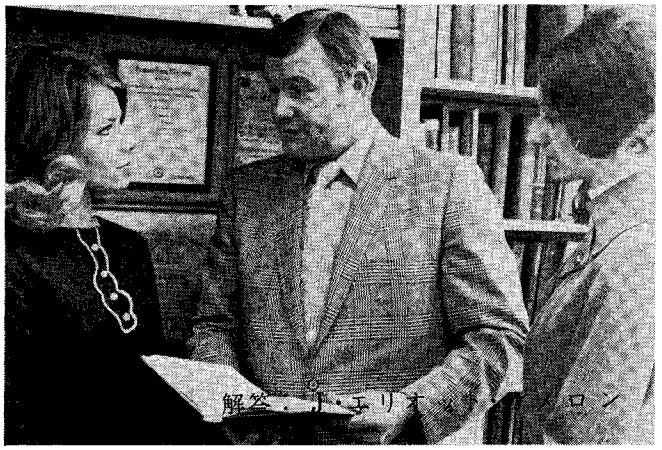
驚くべきことには，この男が前世で存在していたという使徒たちの根本的な仮定を否定しようとも，正そうとも，変えようともなさらなかったのである。

5．**聖書のある聖句は，人の前世の存在に光をあてることによってのみ意味をなしてくる。**われわれは末日聖徒として，人が前世で霊の状態にあった時，神の子の三分の一が神にさからい，サタンに従ったことを知っている。（教義と聖約29：36—38，モーセ４：１—４，アブラハム３：22—28参照）この知識が，ある不従順な者たちが天から追放されたことに関して述べてあるいくつかの聖句に意味を与えてくれる。たとえば，Ⅱペテロ２：４，ユダ１：６，ヨハネ黙示録12：７—９を考えてみるとよい。

以上説明したいくつかの聖句が，人間の前世の存在について「決定的な証拠」をあなたの友人に与えてくれるかもしれないし，あるいは与えないかもしれません。しかし私は，もし友人が，神の真理を心からさがし求めるなら，その人の末日聖徒イエス・キリスト教会の教義と信条に対する熱心で心からの質問に十分な証拠を与えてくれると確信しています。

エルディン・リックス
ブリカム・ヤング大学
宗教教育助教授

「宗教教育は学術的教育よりも大切ですか」



今日，著者にとってこの質問は確かに関心の的です。ダニエルはわれわれの時代を啓示で次のように示された。「多くの者は，あちこちと探り調べ，そして知識が増すでしょう。」（ダニエル12：４）

パウロはテモテに「あなたは真理の言葉を正しく教え，恥じるところのない錬達した働き人になって，神に認められていることを示せるよう，学びなさい。」（Ⅱテモテ２：15欽定訳より和訳）と語り更に次のようにいっています。

「しかしこのことは知っておかねばならない。終りの時には，……人々は……常に学んではいるが，いつになっても真理の知識に達することができない。」（Ⅱテモテ３：１，２，７）

現在，知識のための知識の習得について大いなる警告が発せられています。ある論説者は次のように指摘しています。

「知識はもはや生活からかけ離れたものではありえない。知識や教育は，ある専門分野では，それ自身を追求することが目的であるものもあるが，今日，この二つは生活の中のあらゆるものについての知識を高める目的の手段となっている。」（フォチューン紙1964年11月号）

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は次のように言っておられる。「知識は理性と啓示の双方よりもたらされる。調査と分析によってできるだけ研究し習得するよう望まれるが，理性と研究の領域でわれわれが学ぶ能力には限界がある。神につけることは，神のみたまによってのみ知ることができる。」

主は，われわが次のような多くの事柄を学ぶよう勧めておられます。すなわち，「天にも地にも地の下にも関わりあること，またすでに起りたること，今有ること，近く必ず起らんとすること，また国内に有ること，国外にあること，また戦争，諸国民の葛藤，地上に下る審判，而して国々と王国とに就ける知識なども また然り。」（教義と聖約88：79）

われわれはそこで，もし主の訓戒に従うなら，学術的な研究を無視はできないという結論に達するに違いありません。

しかしこのことは，学術的な研究にのみ専念するという意味ではありません。主は，「理論と原理と，教義と福音の律法と，神の王国に就けるすべての事は更に完全に教えらるる」べきであると述べておられます。（教義と聖約88：78）

あらゆる学術的教育が，宗教教育から分離していると信じてはなりません。知識が増すにつれ，そしてそれが，神のみたまの導きで得られる時，われわれは，宗教の教えを一層よく理解できるのです。

ニーファイの弟ヤコブは次のようにいましめています。「おお人間の虚栄と意志の弱さと愚かさよ。人間は学問があると自分は賢いと思って神の訓戒に耳をかさず，自分独りで解ると思って神の訓戒をうち捨てるから，その智恵は愚であって何の益にもならず，かれらはついに亡びるのである。しかし，人間がもしも神の訓戒に従うならば，学問のあるのも善いことである。」（Ⅱニーファイ９：28—29）

われわれが得る学術的な知識は，この世の物質的なことを追求するのには益があるが，霊的なことや永遠の真理について得る知識はこの生涯にあって，また神の王国で永遠にわたって幸福に生きる備えをさせてくれるのです。

われわれの究極の目標は，永遠の天父なる神のようになるのに必要なすべての知識を得ることにあります。われわれの精力や能力を神と神の律法に関する知識を得ることにそそぎ，いたるところで見い出せる永遠の真理に沿って生きようとする時のみ，そのような方向に向って進むことができるのです。

Ｊ・エリオット・カメロン
十二使徒地区代表
ブリガム・ヤング大学学生部長

4

「宣教師の任地は，どのようにして決められるのですか」

解答：スペンサー・W・キンボール

「われらは，福音を宣べ，且つその儀式を執り行うためには，啓示と，権威ある者の按手により，神によりて其任に召されねばならぬことを信ず」

この方針に従って，どの宣教師も教会の大管長を通じ，神より召されるのです。アロンが召されたのもこの手続きによります。主の予言者モーセは，主によりアロンに召しを与えました。

宣教師の任命にあたっては，多くの要素があり，その主なものは宣教師役員会が受ける霊感です。役員たちは，ステーキ部や伝道部から送られてくる全部の推薦状を注意深く，祈りの気持で点検します。そしてこの役員たちが推薦状を作る時は，次のような多くの事柄を考慮するのです。すなわち，適正，年齢，経験，兵役関係，家庭，財政，健康，語学力，希望度，定足数，入国制限，要望度，国民性，全般的態度（受け入れ），全伝道部の必要度，などです。以上の全要素が十分に評価されて，その人がどこで最も良く貢献できるかを見定めるのに誠実な努力が払われます。主の霊感を熱心に求めるのです。大管長の承認を求める試案（任地について）が作られ，大管長はそこで召しに署名し，それは各宣教師候補者に郵送されるのです。

スペンサー・W・キンボール
十二使徒評議員会会長

5

「女性は夫を支持するように教えられていますが，どの程度夫に従ったらいいのでしょう」

解答：ジェレア・シンプソン

末日聖徒の女性が夫に示す熱烈な支持は，その夫が神の戒めにさからって妻を導こうとする時に弱まりかけるものです。けれども，そのような状況にあってさえ，妻は夫が正しい方向に向くよう納得させる責任があります。もし夫婦が互いに真実愛しあっているのなら，二人はお互いの良き生活と幸福をもたらすのに喜んで犠牲を払うことでしょう。寛大さ，愛，親切，これらは，大いなる人間関係を保つのに必要な部分を演じるのです。

夫もまた，妻を支持し励ましてやる責任があります。モルモン経典の中で，ある身持ちの悪い夫のことを，ヤコブが嘆いて書いています。（ヤコブ２：33参照）主はヤコブに，その夫らがもし改めないなら「ひどくのろいてこれを亡ぼす」であろうと言われました。このように，結婚の相手に忠実であって支持する責任は，夫と妻の双方にあるのです。

けれども主の家は秩序の家です。主は，夫が家の頭となり，妻は助け手となるよう定められました。もし，妻は誰でもこの役割を受け入れて，また夫は誰でも，家長として，愛，柔和，権威をもって自分の役割を果たすなら，結婚生活における多くの不和を取り除くことができるでしょう。

男性は，妻が自分を完全に信じていると思いたいものなのです。妻は，毎日，夫が家に帰ったら，外の世界の悩みの避け所となるように，家庭を備えておく必要があります。妻は，夫の成功を心からほめてやり，話に耳をかし，くじけた時に励ましの言葉を与えてあげねばなりません。家庭以外一体どこに，男性を完全に受け入れるところがあるでしょうか。

今日，女性は家庭外の多くの事柄にかかわりあっていますが，妻はたびたび，夫との関係以上に大切なものはないことを思い出す必要があります。主は私たちに，一人では日の栄光の最高の位に入ることはできないと言っておられます。昇栄と永遠に増し続けるという栄光は，神の戒めを守った正しい二人のために用意されているものです。愛は培われ，守られてゆく必要があり，そうして永遠の愛へと成長してゆくのです。

年ごとに，あなたと夫の愛が強くなり，夫が神権を尊ぶ姿を目にし，子供が教会内で活発であるのを見守り，永遠に共に住む姿を期待する，このこと以上のしあわせを，この世で見いだすことはできません。

ジェレア・シンプソン
ロバート・L・シンプソン
十二使徒補助夫人

人生の転機となった日

ウェンデル・B・ジョンソン

「奇跡によって，16才の時の人生のやり直しがきくとしても私はあえてそうしないであろう。」

ユタ州メイプルトンの小さな町に，1964年の水泳中の事故以来，身体が不随の23才の祭司定員会指導教師がいる。「彼は我々の町全部に感化を与える人物ですよ。」と彼を知る人は言う。彼は自分の指導する定員会を車椅子や寝床のかたわらに集めて，その責任を果たしてきたのである。彼の話は，あなたの人生をも変えるかもしれない。

要注意の状態がようやく峠を越し，私は新しい部屋に移された。私は，自分というものを知るために，また自分の人生に忍び込んで来た誤ったプライドを追い出すために，過去の人生を振り返ってみることに，多くの時間を費やした。全く無力な状態から，私は健全な肉体の大切さというものを，認識するに至ったのである。奇妙なことのようだが，肉体の妨害がなかったならば，自分の霊的な面を知るのがずっと容易であろう。私の霊的な生活は，この点まで不足していたのであった。

若者が，いかに悪の道に走り始めるのか，私にはよくわからない。私にはあれ以上の幸福な子供時代は，望むべくもなかった。私の父は自然を愛し，私たちを戸外の美しさや観賞を通して，育ててくれたのである。母の方はと言えば，機知や歌によって，私たちの生活を豊かなものにしてくれたのだ。私は教会員として成長した。福音の話を好んだし，執事になることを夢見ていたものだった。私は自分のバプテスマの日をよく覚えているし，その儀式の時の気持を忘れもしない。

しかし，私が，教師になった頃，思うに崇敬の念などみじんも持たない一団の少年たちと一緒になって，後ろに座り始めたのである。この時以来，私は決して福音に感謝する気もなかったし，聖典を勉強すべく，努力しようとか証を得ようなどという気は，毛頭なくなったのである。福音や霊的な進歩のない人間が，この世的な物事に心を動かしていくのは，自明の理であろう。そんな状態になるのに，大事故を経験し，三年の月日が経ったが，とにかく，私は高校の初期に，私の性格の一部となった気紛れと虚偽を通してでも，物事を見ることができるようになったし，そういった価値感の多くが，いかに流動的で浅薄なものでしかないかを，理解できるようになったのである。

時代は再び1964年8月のある美しい夏の日まで溯る。陽は早くから高く昇り，確かに，大変暑かったが，農作業には好適であった。わらや乾し草の収穫期だった。私はユタ州メイプルトンの河の段丘で，地方の農民に雇われて働いていた。

その日は非常に収穫の多い日であったが，午後もひどく暑かったので，私たちはその段丘の乾燥地にある，お気に入りの入江に泳ぎに行くことに決めた。用水路はこの地方の，生命線の役目を担っていたのだが，粘土質の堤に水の流れが，うまく小さい水泳用の入江を作っておいてくれたのだ。そこでは何世代にもわたって，少年たちが7，8月の暑い日など，体を冷やして楽しんでいたものだった。

その入江の東側は，堤が3メートル程の高さになっていたかと思

う。1964年のその午後，私がその上に立つと，夏の入道雲が段丘の方へゆっくりと頭をもたげ，心なしか険悪な雰囲気をかもし出していた。

私が水面をのぞき込むと，奇妙な震えが私を捉えたのである。しかし，そんなことを何ら気にとめようともせず，体勢をたて直して浅い飛び込みになるような形で飛び込んだのだった。ところが，どうした加減か，私は空中で転回してしまい，そのまま真逆さまに落ちて，水中に突き出ていた粘土の突起にたたきつけられたのであった。その時は，水がやや濁っていて，私にはその突起が見えなかったのだ。突然，私は力一杯底に引きずり込まれたのである。

その衝撃のために，後でわかったことだが，私は首の骨を折り，脊髄が切断されていたのだった。その時，私の脳裏を洪水のようによぎった思いは数多く，その一つ一つを思い出すことはできないが，ただ一つ今でも憶えているのは人は自分の死期がいよいよ迫ると，ほんのつかの間に自分の一生を眼前に思い浮べるものだということがわかったことである。そういう恐ろしい最後の瞬間を経験したものだけが，理解しうるであろう。

強い流れが，私を捉えて底の方へ引きずり込むと，私は突然それまで知っていた感覚は，今では記憶の中にだけしか存在していないことに気付いた。首から下の私の体は，完全に麻痺していたのである。それは，まるで巨大な電気回路のスイッチが入れられ私の体をしびれさせたようであった。

私は危機に直面している自分の立場というものを，序々に認識しつつあった。底に打ちつけられたために，私の体は麻痺しており，水面に泳ぎ出るために筋一つだに動かせぬ状態であった。このくらいの年頃では，死に対する恐れやいかなる物に対する恐れをも持たずに生活するものである。若人というものは，生きるはずなんだと信じ込んでいるのである。だが，私はその底で私の一生は16才などという若い時に終わりっこはないんだという気持ちから，ハッと目がさまされた思いがした。

事態を打開しようと懸命になるが何も起らない。普通の泳法に従って，手足を動かして泳ごうとしても，何ら手応えがない。どんな大きくて耐えられない程のものでも，私の体の感覚からは切り離されてしまったのだ。私は自分が溺れる寸前であると悟った。

なすすべもなく流れに身を任せていると，自分の意識がもうろうとして来た。ひどい耳鳴りが段々激しくなり，そしてまた小さくなっていった。私は，何らなすすべもなく，もはや死が目前に迫っているという事実に身を任せてしまったのである。すると突然，私の体は水面に向かって浮かび始めた。ぼんやりとではあるが，私は陽の光を見ることも，自分が引き上げられている感覚を味わうこともできた。その日，私と一緒に働いていた友達が，私を水中から引き上げてくれたのだった。水中に沈んでいる間，呼吸をしようと激しくもがいたために，正にはち切れんばかりであった肺が大気を一杯に吸い込んだ時，自分は助かったんだという感じが激しく湧いてきた。7人の友人が水に飛び込んで，私を水辺に注意深く引き上げ，近くのほこりっぽい道のまん中に横にしてくれた。

私は自分の体を見下した。確かに自分の体の一部ではあったが，それが，感じられなかった。現実のものではなかったのだ。私は，心身共に，信じられない程，疲労こんぱいしていたので，非常に苦しい中からも，こんな状態はすぐにでも終わってしまうことを期待していたのである。ある意味では，終わりのない悪夢が，始まったばかりだということも露知らず……。

メイプルトンの救急車は，最上というわけではなかった。私はその中に運び入れられたが，エンジンがかからなかったのだ。それがかかるまで，車を押してもらわなければならなかった。私は，他人の不幸を知らせて鳴りたてるサイレンの音がいつも嫌いであった。だが，今度のサイレンは，自分の身に起こった悲劇を知らせているのだ。そして，人がめったに出くわさないような経験へ否応なしに私を導いていたのだ。

病院の古い病棟へ送られるにつれて，廊下も暗くなっていった。入口に札が見えた。「重患病棟」という札であった。私は，自分の回りに，いくらでも病院の音を聞くことができた。酸素吸入室から出るあえぐ音，種々の機械の電気音，危篤状態の人が，生き延びようとしている声……。

医師が，レントゲンをとってみると，私の脊髄は，殆ど切断されており，首の部分は，第6頸骨と第7頸骨の間で，折れていたのであった。彼らはその時，私が生涯歩けぬことになるとは言わずにいた。ただ目下の関心事はその夜の峠を越して私の生命を取りとめることだったのだ。彼らは，私を脊椎疾患用の特別仕立の機械に移し，私の頸骨に小さく2カ所局部麻酔を施し，ドリルで骨の第一層まで届く二つのきざみをつけ，頭骨と頸骨を押さえつけた。この状態が，13週間，続くことになったのである。私の動かすことのできるものと言えば，まばたきをすることくらいであった。そして，私は自分の首が絶えず反対の方へ引っ張られていると感ずることができた。自分の生涯で，この時程無力感を味わいまた当惑したことはなかった。

この時に，私の父と祖父が私の頭に手をおいて祝福を施してくれた。そして生涯で初めて，私は実際に神権の力を感ずることができた。安らかな，暖かい気持が私の心に入り込み，価値感と希望らしいものが私の生涯に芽生えた。確かに，希望とは霊を高揚させる現実の力であると言えるだろう。希望と神の御霊があれば，人は行く手に立ちふさがる障害をも克服しうるのである。

時が経つと，私は折れた脊椎骨の接合のため手術を受けた。切開部の治療がようやく終わり，私は神経機能がどの程度まで回復の望みがあるかを見るため，毎日その治療をした。最初は何ら反応がなかった。そして私は自分の腕がひどくしなびてしまったのを見てショックを受けた。私がつらい農作業を通して鍛えあげた筋肉は，みなだめになってしまったのだ。私たちは，全くの一から出直すことにした。

失望に満ちた作業が続いた。そんなある日，臨床医が残存している2頭筋に操作をしていた時，筋力のひきつりが見えたのだ。これはこの15週の間に，私の腕に起きた最初の微候であった。私たちはこのひきつりに全力をあげて取り組み始めた。1週間のうちに，これは，第2のひきつりの原動力となった。この小さな回復は希望の源となった。正直に言って，これが神権の祝福の結果であったと感じている。と言うのは，当然私は残る全生涯を完全に体が麻痺したまま過ごすはずであったのだから。

州知事とヒル空軍基地の軍の好意により，私は事後治療のためにカリフォルニア州パロアルトのスタンフォード医院センターへ飛行機で輸送された。その晩，私は一人ぽっちと思ったために，ひどく

恐ろしかった。しかし，翌日にはあるワード部の監督がやって来て自己紹介しカリフォルニアへ来たことを歓迎してくれ，また私が回復の努力を続けるよう励ましてくれた。

私たちは精力的に治療に取りかかり，大方腕と首と肩に集中した。私はまだひじから下の手首や手は全然動かせないでいた。それで，私はスプーンが持てるよう特別の付属装置のついた添え木を体につけていた。私は一かけらの粘土をつまんだり，独力でピーナツバターを食べようとすることから始めた。私は，ピーナツバターをこぼすなんて夢にも思ってなかったが，結構何回もやってしまったのである。私は自分の口を見つけ出すのに大奮闘をし，また，マッシュポテトやその他いつでも食べようとするものは何でも，顔中一杯にしてしまった。ひきつりの方と言えば，一つの動作ができるだけであった。腕を曲げることができたこと——それだけだったのである。

私は子供の頃，油絵や製図や図画等，とにかく美術に関係したものなら何にでも関心があったものだ。しかし，今ではペンや絵筆を持つ力さえ失ってしまったのだ。才能は使わなければ発達せず進歩が止まるという聖句が，心に浮かんできた。正にその状態が私に起きたのであった。

そんなある日，私は座って肩の運動力を強化するために砂をいじっていると，テーブル上の鉛筆に気付いたのである。しばらくの間私はふと夢見て鉛筆を取り上げて自分の名前を書くというような単純なことができたら，どんなに素晴らしいだろうと考えた。このことから，どんな小さなことでもいかに大きな意味を持つかということを学んだのである。

私の要求に応じて，添え木工は，私が鉛筆をほぼ正常の状態で持てるよう添え木用の小さい付属品を作ってくれた。私は紙をじっと見つめたが，始めるのが恐ろしかった。幼な児が初めてクレヨンを手にするような気持であった。ところが，紙に鉛筆を付けた私が見たものと言えば，自分の書いた意味のない走り書きでしかなかったのである。私はアルファベットの基本文字さえ書けなかったのだ。

この時，障壁となったどうしようもない失望感について，更に詳しく書くことはやめよう。しかし，3カ月間の治療の後，小さな木を1本描くことに成功したのである。そして，自分の名前も書けるようになった。これは，私にとって偉大な進歩であった。

家に帰ると，再度私は個人での勉強と広範な読書を一生懸命やろうと試みたが，私は自分がある大きな危機にのめり込もうとしていることに気がついた。その夏，教会に行こうとしたのだが，そうすることは苦しい試練であった。私は，自分がまわりから見つめられていると感じたため，非常にささいな事にさえ自己防衛的になってしまった。聖餐をいただくのに他人の手を借りねばならないのは屈辱であった。人々に対する私の反応は偏執病的になり，私は，自分が，何ら価値がなくまた罪な人間であるという気持を心の中に入り込ませてしまった。私は教会との接触を断ち始め，自分の家の裏の自室に引きこもりがちになった。私が，孤独とゆううつの世界に引き込まれたのはこの頃である。5カ月というもの，私は自分自身を苦しめ自分のやっと得た力を捨ててしまった。この頃の私には，不具という言葉が，精神的にも肉体的にもあてはまったのである。

私はするはずの祈りをも無視し主の許しを疑った。私は，全面的に気まずくなったわけではなかったが，希望だけは捨てまいとする無駄な試みをしていた。私は，今では，自分がこんな態度に陥ったのはキリストの犠牲を顧りみなかったためであると知っている。

秋が冬になり，部屋が暗くなるにつれて私の心も暗くなっていった。私は欲求不満と自分がこの世に来た最も価値のない人間であるという気持に段々と陥っていった。

そんなある晩，母が入って来て私に来客がある旨を伝えた。部屋に入って来た男の人は，背が高く，自信に満ちあふれていた——自分の性格と全く反対であった。彼は，自分が地方セミナリーから来たハウズ兄弟であると名乗った。つい最近，町に引っ越して来たのだが，彼は，私たちがまるで以前からの友であるかの如く様々なことを話した。その時は気付かなかったが，この男の人が私の福音に戻る大きな動機の一つとなったのだ。

私は，彼がせいぜい訪問してくれても，1，2回だろうと思っていた。しかし，その疑念は思い過ごしであった。毎週，彼は聖典を携えて来て，私の霊的な面の栄養補給を始めた。私にとって一番必要なものであった。彼の助けを得て，私は再び勇気と希望のかげがかすかに見え始める程に，自分を高め始めた。時が経つにつれ，私は自分で聖書やモルモン経を読む程興味をもつようになった。そして私は初めて，祈りを通して自分の胸に確固としたものがあることを理解しはじめた。真理である。

このようなことを通して，人々は依然として私に好意を示し続けてくれたし，時の経過につれ私も段々と彼らを快く迎えるようになった。そんな友の一人は，トム・ネルソンといった。彼はほとんど毎日訪問してくれ，私たちは非常に親しくなった。これは皮肉であった。というのはこの事故の前私たちはいつもお互いにけんか腰であったし，めったに口をきくこともなかったからである。私は，彼が今教会に非常に活発で喜んで神権と神殿の仕事を果しているのを見て心から喜んでいる。

私の信仰は，遅々とはしていたものの進歩し続けた。そしてある日，監督が入って来て，私に祭司定員会の書記をやってくれないかと尋ねた。私はためらいつつも，もし監督が私にできるとお考えならやってみましょうと答えた。これもまた転機となった。私が前途を大きく変えることができたのは，この定員会会員のおかげであった。私は自分の伝道をやってはいなかったが，もしやりたいものが一つだけあるとすれば，それはこの伝道であった。しかし，私は私の友達が成長して伝道に出て行くのを見て心の中で彼らと共に伝道に赴いた。そして，彼らが準備している時，彼らと一体感を味わうことによって非常な満足を見い出した。

私の境遇は，実際私にとって祝福であった。なぜなら私はそうではなければ無視していたであろうような，多くのことを学んだからである。例えば私は，私たちが自分の分さえ尽くせば，主は確かに約束を守られるということを学んだことである。私は美術をする力を失いはしたが，主のためにこの能力を得，それが喜びの源であることがわかったのである。この事故は，私に人生に無料で与えられる美を充分楽しむ時間を与えてくれた——山々，日の入り等，私たちが時々当り前と思い込んでいるたくさんのものを。それは私に主のみ手になる業を愛することを教えてくれた。主はその自然のパノラマと絶えず増し続ける驚異のために，私の大好きな芸術家となった。

私はまた忍耐を学んだ。誰もが持ち過ぎることのない価値ある性

質である。

恐らく私の営んだ最も大切なことは，善い事は人生における逆境から生じうるということであり，私には逆境なしに霊的に成長することはありえないことのように思えるのである。私は，ジョセフ・スミスが，リバティーの獄に囚れの身になった時，彼に与えられた忠告についてしばしば考える。「わが子よ，汝心安かれ。汝の不幸汝の困苦はただこれ束の間なり。然り而して，もし汝よくこれを耐え忍ばば，神は汝を高きに挙げたまわん。かくして，汝あらゆる敵に勝つことを得ん。」（教義と聖約 121：7—8）

たとえ科学の奇跡が起きて，私に16才の時の人生のやり直しがきくことになったとしても，私はあえてしないであろう。私は，自分が今までの人生で遭遇したすべての障壁に喜んで立ち向かうであろう。もしそれが，私がイエス・キリストの福音に見い出したような喜びと真理に再び導いてくれるなら，7年の間，喜んで車椅子を使って不具者の生活に甘んじるであろう。私たちに希望がなくなったり，悔い改めができぬと感じたり，自分の状態が耐えがたい程の低みにあると感じる時はいつも，この救い主のみ言葉に勇気を見い出しうるのである。

「『人の子』は一切これらのものの下に身を落したり。汝は彼より大いなるか。」（教義と聖約122：8）

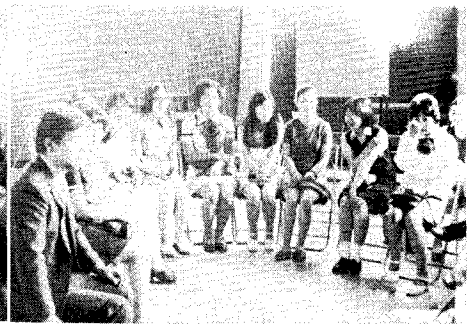
私の人生が喜びの極みに達したのは，私の21才の誕生日に長老に聖任されて，最近神殿で自分自身のエンダウメントを受けた時である。福音は，今では以前に増して，私に意味を持つものとなった。そして，私たちを導くために与えられた戒めを守って生活しさえすれば，神権がさながら生ける水を出だす井戸の如く，約束通り永遠の生命へと向かって成長し続け，水をわき出し続けるであろうことを私は知っている。

私がただ一つ望むのは，私の話を読んで若い人々が自分の肉体を感謝し，それを清く保つよう助けとしてくれることである。肉体は確かに神の宮居なのであるから。

私の話を，この短い詩で終ろう。私が「障壁」と名付けた詩である。

人，肉の身で，不具になるといえど
　　霊の身にて，更に歩む
人，目しいとなるといえど
　　その魂は，霊の世界の事物を見ん
人，耳しいになるといえど
　　悔い改めを呼び求むキリストの声
　　さらに明らかに聞かん
人，齢長けるといえど
　　福音のうちに在りたる若さを保たん
なお，友よ，かくの如き障壁
　　汝らの身になしと言えば
　　汝らの義の生活をおくらんとするものを
　　阻むもの，何があらんや

日本東伝道部



北海道地方部

支部大会

6月には札幌，旭川，室蘭支部と支部大会がつづきました。一つの特徴は北海道地方部に増えつつある伝道所の会員にも最寄りの支部から働きかけて，支部伝道所が一体となってこの支部大会を盛り上げたことです。

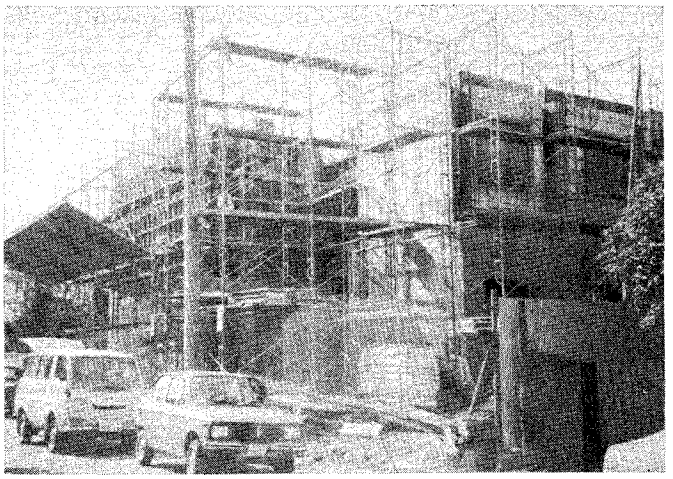
札幌支部では日曜日に180名もの会員が集まり聖餐会後，「明日の札幌支部を語ろう」というテーマのもとに親睦会をかねた討論会が熱心に開かれました。

また，6月12日より旭川支部大会が始まり，その一環として6月17日旭川支部MIA大会が開催され，60余名の会員達が集まり，この中には遠く伝道所から7名の姉妹の参加がありました。この日，参加予定の北見，釧路各伝道所の会員達は残念ながら出席できなかったが，開会の時に今村安孝旭川支部YMMIA管理会長の言葉の中に，内気な兄弟姉妹はヘンシーン（変身）して積極的にプログラムに参加して楽しくすごして下さいとの事，この会に集まった全ての老若男女がミュージカルにダンスに，合唱に，演奏に，奇術にと，珍芸を交えてみごとな変身をみせ，ふんい気を盛り上げていました。特に帯広伝道所の姉妹達による珍説白雪姫はユーモアあふれるもので，会場一杯に集まった兄弟姉妹達の笑いを誘っていました。翌日，土曜日から来ていた帯広伝道所の会員も交えて朝8時よりゼミが開かれ，続いて神権会，日曜学校，聖餐会と会が進められ教会堂に集う全ての会員の証を強めるものでした。

ユーモアあふれる白雪姫を演じる帯広伝道所の姉妹たち

舞台いっぱいに演技をくり広げる姉妹たち

若さあふれる西宮チャーチビルダーとブラウン監督，松本副監督



当伝道部初の二階建の教会堂（名古屋支部）

日本中央伝道部の更に一層の発展の為に支部礼拝堂の建築は急務である。先に京都支部の竣工（3月末）を見，続いて名古屋支部（業者）西宮支部（チャーチビルダー）の建築が着工され，今秋9，10月頃竣工の予定である。会員たちの犠牲はこの建築プログラムの推進力となっている。伝道部内の全ての支部会員の皆さん，全支部に礼拝堂建設の為に建築資金の準備をしよう。主の勧告はつぎのとおりである。

「われ誠に汝らに告ぐ，汝ら一つの家を建つるはわが旨なり。汝らもしわが命令を守らば，これを建つる能力を与えらるべし」（教義と聖約95：11）

「正しき業を行う者はよき報いを得，すなわちこの世にありては平和を得，次の世にありては永遠の生命を得ん」（教義と聖約59：23）

「……およそ，働く者のその酬いを受くるは当然なればなり」(教義と聖約106：3）

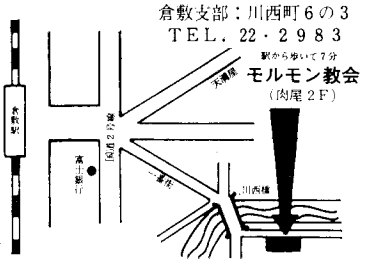
躍進，成長し続ける 日本中央伝道部

明治の情緒の古き都市—倉敷にも伝道開始！

集会所も決まり会員の助けで清掃する宣教師

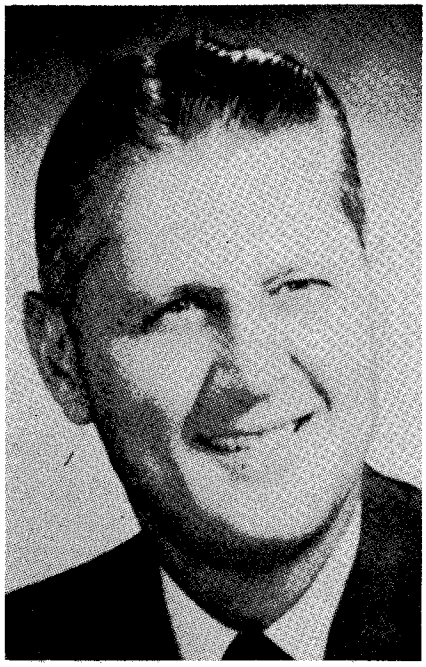
万博後の日本中央伝道部の伝道活動はめざましく改宗者は急増している。更に主の予言の通りあらゆる人々に福音は宣べ伝えられようとしている。和歌山（現独立支部）豊橋（現独立支部）富山，福井についで岡山支部付属支部として「倉敷支部」が開設された。近い将来更に各都市に支部が開かれ，伝道部は発展的に分割され地方部も強化発展していくにちがいない。これは，主のことばであり主の業である。

「その日，イエス，キリストを啓示するために彼らの上に注がるる『慰め主』の施したもうによりてこの能力を授けられたる者たちの口より，あらゆる人々は己が国語と己が言葉にて完全なる福音を聞かん」（教義と聖約90：11）



日本中央伝道部の若き神権者に告ぐ！この業の発展の為に伝道，宣教師として働く機会は今である。一切のこの世の業をしばし捨てて主の業の発展のためにすばらしい機会を得よう。支部長はあなた方との面接を開始している。

新　管　理　監　督　会



H・バーク・ピーターソン

ボーン・J・フェザーストーン

ソルトレークのタバナクルで4月6日に開会された第142回年次総大会において，2名の新しい十二使徒補助と新管理監督会が支持された。

十二使徒補助に支持されたのは，管理監督のジョン・H・バンデンバーグと彼の第一副監督ロバート・L・シンプソンである。この結果十二使徒補助は15名となった。

新しい管理監督は1961年10月以来，バンデンバーグ監督の第二副監督を務めてきたビクター・L・ブラウンである。

ブラウン監督の副監督に指名されたのはアリゾナ州フエニックスの十二使徒地区代表，H・バーク・ピーターソンとアイダホ州ボイス北ステーキ部のステーキ部長ボーン・J・フェザーストーンである。フェザーストーン監督は，前教会神権伝道委員会の会員であった。

バンデンバーグ長老は新しい教会の施設部の支配人としての責任を受けることになり，この部は現在の教会建築部，施設管理部，不動産部を調整することになる。

さらにバンデンバーグ長老は数々の教会農場運営の重責をも負われる。

シンプソン長老は十二使徒評議員のマービン・J・アシュトン長老を引継いで教会社会事業部の支配人となる。アシュトン長老は十二使徒評議員のマリオン・G・ロムニー長老に替ってこの部のアドバイザーとなる。

二人の新しい副監督は経験豊かな教会指導者であるばかりでなくその職業の分野においても傑出した人物である。

ピーターソン監督は48歳で，アリゾナ州，コロラド州，ユタ州にあるアメリカ工学株式会社の有名な技師であり経営者でもある。

フェザーストーン監督は41歳で，西部スーパーマーケットチェーン，アルバートソン会社の生産販売役員であり，現在はトレーニングマネージャーをしている。

ジョセフ・フィールデング・スミス大管長逝去

第10代大管長ジョセフ・フィールデイグ・スミス

7月2日（日）午後9時20分，ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は，ブルース・R・マッコンキー長老宅で逝去された。その時の模様について，マッコンキー長老は次のように語っている。「大管長は眠るかのごとく安らかに逝去されました。」事実大管長はイエスが「ラザロは眠っている」と言われた眠りにつかれたのです。愛する妻ジェシーがほぼ11カ月前に召された時に座っていた同じ椅子に座ったまま亡くなられました。

献身と奉仕と模範の生涯を送られた，スミス大管長を失ったことは，誠に残念である。しかし，N・エルドシ・タナー副管長はこのように語っている。「スミス大管長の死は，悲しみではなく喜びです。私たちは彼の生涯と彼との交わりから有益なものを得ました。しかも，私たちは大管長が十分に備えてきた大きな報いを受けられることを知っているのです。」

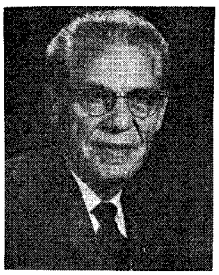
スミス大管長の葬儀は6日（木）に行なわれ，遺体はソルトレーク市営墓地に安置された。

スミス大管長は，6代目大管長ジョセフ・F・スミスとジュリナ・ラムソン・スミスの息子として1876年7月19日に生れ，また予言者ジョセフ・スミスの兄ハイラム・スミスの孫である。1910年に33歳で使徒に聖任され，1970年1月23日に大管長となった。

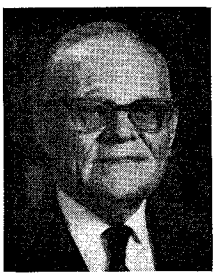
新しい大管長会

ハロルド・B・リー
大管長

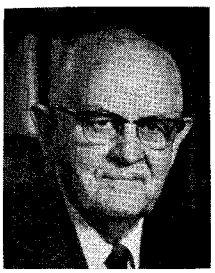
7月7日（金）十二使徒評議員会会長ハロルド・B・リー長老は，按手聖任を受け，第11代目大管長に按手任命された。この聖任は，スミス大管長の死後教会の管理権を有することとなった十二使徒評議員会の会合の後に執り行なわれた。また，リー大管長は第一副管長にN・エルドン・タナー長老を，第二副管長に十二使徒評議員会会員のマリオン・G・ロムニー長老をそれぞれ指名した。十二使徒評議員会会長には，スペンサー・W・キンボール長老が指名された。



N・エルドン・タナー
第一副管長



マリオン・G・ロムニー
第二副管長



スペンサー・W・キンボール
十二使徒評議員会会長

聖 徒 の 道
昭和42年12月18日第三種郵便物認可
1972年8月20日発行（毎月1回20日発行）第16巻 第8号